

同志社女子大学



FD レポート

Faculty Development

第 6 号

2013. 3.

CONTENTS

巻頭言◆

『FD レポート』第6号の刊行によせて 学長 加賀 裕郎 1

2012 年度 FD 講習会◆

講演『PBL（プロジェクト学習）は学生を変える！』
..... 同志社大学 PBL 教育支援センター長・文学部教授 山田 和人 2

2012 年度新任教員入社前オリエンテーション FD ガイダンス開催報告◆

2012 年度新任教員入社前オリエンテーション FD ガイダンス開催報告
..... 生活科学部人間生活学科 赤澤 真理 22

本学 FD 推進事業について◆

学芸学部「ピアノ奏法研究Ⅱ」（中野慶理先生）の授業を参観して
..... 教育・研究推進センター主任 河江 優 23

現代社会学部「国語科指導法」（松崎正治先生）の授業を参観して
..... 教育・研究推進センター主任 朱 捷 24

薬学部「衛生化学」（木津良一先生）の授業を参観して 教育・研究推進センター主任 川崎 清史 25

表象文化学部「Junior Seminar Ⅱ」（Juliet W. CARPENTER 先生）の授業を参観して
..... 教育・研究推進センター主任 若本 夏美 26

生活科学部「栄養教育論」（片井加奈子先生）の授業を参観して
..... 教育・研究推進センター主任 伊藤 節子 27

第9回 FD-YG 会の開催報告 教育・研究推進センター主任 朱 捷 28

FD 図書紹介『大学教育のネットワークを創る』 教育・研究推進センター主任 朱 捷 29

TA 制度導入報告 教育・研究推進センター主任 朱 捷 30

TA と LMS 教育・研究推進センター主任 若本 夏美 31

メルマガ「FD ニュース」の発行報告◆

FD 活動報告（2012 年度）◆

2012 年度 FD 事業の日程・概要◆

巻頭言◆

巻頭言 『FD レポート』 第6号の刊行によせて

学長 加賀 裕郎

教育の充実を目標として教育開発推進センターが設立されたのは2006年4月でした。同センターから『FD レポート』創刊号が刊行されたのが2008年3月、その後、発行母体が教育・研究推進センターに代わってからも『FD レポート』の刊行が続き、早いもので、今回で第6号を出すことができる運びとなりました。関係各位のご協力に深く感謝申し上げる次第です。

FDあるいはSDということばが大学の世界で使われるようになってから、かなりの年月が過ぎました。思い起こすと、私が教務部長を務めていた今から十数年前、東京から私大連のFD関係の委員を務めていた知り合いを講師に招き、全学教授会終了後にFD講習会を開催したことがありました。しかし教授会終了後、多くの教員が帰ってしまい、残念やら、講師の先生に申し訳ないやら、複雑な気持ちだったのを覚えていています。

また同時期、京都市内の大学を会場に行われていたFDフォーラムに何回か出席したこともありました。当時の記録を見てみますと、基調講演やシンポジウムには錚々たる人びとの名前が連ねられています。私が記憶に残っているのは、2000年12月16日、京都産業大学で行われた第六回FDフォーラムの基調講演です。講演者は京都大学の西村和雄氏でした。西村氏は『分数ができない大学生』などの著作で大学生の学力低下を指摘し、2000年以降の脱ゆとり教育への流れを作った一人と言えます。私が参加した何回かのFDフォーラムは熱気あるものでしたが、どちらかといえば、FDに関心の高い一部の人びとのものという感触がありました。本学からの参加者は各パートから二名が割り当てられていましたが、当初は役割分担的な出席が多かったように思います。

FD、SDということばが日本に導入されてから既に久しく、1990年代以降、日本の政財界から大学に寄せられる教育要求も強くなり、また要求内容も詳細かつ多様なものになっていましたが、率直に言って、大学界の反応は鈍く、時代の流れについていけなかったと思います。しかし平成24年8月28日に出された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」では、「大学教育の質的転換」が明確に謳われています。大学教育への期待と要求が、かつてないほど高くなったと言えます。

大学の自立自治、学問の自由は大切であり、外圧に屈するようであてはなりません。今後の大学は、主体的に教育、研究の質を高めていかなければなりません。そのための一つの方法がFD、SDだと思います。このFDレポートが、今後の教育、研究の高度化の一助となることを祈っています。

2012年度 FD 講習会◆

同志社女子大学 2012年度 FD 講習会次第

日時 2012年 9月19日(水) 16:00~17:30
場所 友和館 Y401多目的スペース

司会
教育・研究推進センター所長
山本 寿

- 1 開会の辞 加賀 裕郎 学長
- 2 テーマ PBL (プロジェクト学習) は学生を変える!
- 3 講演講師 山田 和人 氏 (同志社大学 PBL 推進支援センター長 文学部教授)
- 4 質疑応答
- 5 閉会の辞 河野 健男 教務部長

講演『PBL (プロジェクト学習) は学生を変える!』

同志社大学 PBL 推進支援センター長・文学部教授 山田 和人

(開会)

司会 (山本所長) 2012年度同志社女子大学 FD 講習会を開催いたします。司会を務めさせていただきます、教育・研究推進センター所長の山本です。

今回のテーマは、「PBL (プロジェクト学習) は学生を変える!」です。近年では学生の自主的・自立的な学習を促し、課題発見・解決学習を実践させることに主眼が置かれてきております。そこで、同志社大学 PBL 推進支援センター長、文学部教授の山田和人先生をお迎えしてご講演いただきます。

山田先生のご講演に先立ちまして、加賀裕郎学長から一言ご挨拶させていただきます。



加賀学長 本日は年1回のFD講習会ということで、同志社大学の文学部教授であり、またPBL推進支援センター長の山田先生にご講演いただくことになりました。本学の講習会のためにおいでくださいまして、誠にありがとうございます。

先程の教授会で中教審の答申を配ってございましたように、最近では大学教育におきまして質的転換ということが打ち出されています。特に大学が、いわば教育機関としての自覚をして、そして学生の教育の実を上げるということを非常に推進しようとしています。その中で、アクティブ・ラーニングということで、学生にも積極的に能動的に勉強を推進していこうという様々なアイデアや政策、あるいは努力がされて

います。そのうちのひとつとして、今日お話しいただくPBLというのがあると認識しております。問題解決学習、いわゆるプロブレム・ソルビング・ラーニングであるとかプロジェクト法とかいうのは20世紀の前半からあるわけですが、実は大学では新しいのです。

特に同志社大学は、今出川キャンパスに大きな建物を建てておりますが、そのうちの目玉の一つが巨大なラーニング・コモンズで、数字が正確かどうか、私は自信がありませんが、確か2,600平米と伺っております。そこで学生たちが自発的に学習できる、非常に大きな空間というものを造ろうとしております。また、そのための支援センターや専門の先生を置くというような大規模な試みをしておられます。空間を造るだけではありません。その空間を使いこなす教授法、教育的な方法、あるいはカリキュラムなど、そのようなものの開発が当然伴う必要があるわけですが、今日はそのようなことを含めた話が聞けると思っております。

最後でございますが、これまでも同志社大学の先生として、何年か前に当時、同志社大学の教務部長でありました圓月先生にもご講演いただいたことがあるのですが、圓月先生は英文学の専門家、シェークスピアの専門家であります。山田先生は国文学の専門家であります。どちらかという、人文学の一番古典的な分野の専門家である先生たちが、一番新しいことに積極的にチャレンジしているということは、これからの大学の発展にとって一番大きなことではないでしょうか。新しい分野の先生だけではなくて、古典的な研究の分野の先生も新しいことにどんどんチャレンジしていく、そのような時代に入ったのではないかとこのように認識いたします。

今日はこの中に新しい先生もおられます。様々なことを伺って、同志社大学の取り組みの報告、あるいは未来展望というものを聞けたらと思います。本日はよろしくお願ひ申し上げます。

司会（山本所長） ありがとうございます。それでは、これから山田先生に講演をお願いしますが、その前に、お手元のチラシにあります先生のプロフィール等を簡単にご紹介させていただきます。

山田先生は1975年に同志社大学文学部文化学科国文学専攻をご卒業のあと、1979年に同志社大学文学研究科国文学専攻修士課程を修了され、文学修士の学位を取得されています。現在は同志社大学PBL推進支援センター長・文学部教授としてご活躍されています。

先生の研究分野は、国文学、日本近世の文学と芸能です。研究テーマは、演劇・人形浄瑠璃・歌舞伎・からくり・見世物などで、現在は、近松およびそれ以前と以後の浄瑠璃の舞台演出を探ることです。主な著書等は、『洛東遺芳館所蔵 古浄瑠璃の研究と資料』、岩波書店『岩波講座 歌舞伎・文楽』、『竹本義太夫浄瑠璃正本集全1巻2冊』、『古浄瑠璃正本集 角太夫編第1』、その他多数となっております。

それでは、山田和人先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

山田先生 ただいまご紹介にあずかりました山田でございます。しばらく皆様方のお時間を頂戴することになりますが、よろしくお願ひいたします。

お話しさせていただきますメインテーマはPBLということで、タイトルとしては、「PBL（プロジェクト学習）は学生を変える」、そのような趣旨でお話をさせていただこうと思っています。PBLと言いましてもいろいろな考え方がございますので、一般論に裾野を広げて話をするよりも、皆様方に私どもが取り組んでいる具体例をいくつか挙げていきながらお話をさせていただくのが一番いいと思ひまして、打ち合わせの過程で二本立てでいきましょうかという話になりました。

まず一つは、教養教育科目の一つとしてプロジェクト科目というのを、2006年から同志社大学で開講して運営してまいりました。実際にどのようなことをやっているのかということをお話しすることを通して、PBL、プロジェクト・ベースド・ラーニングのあり方について皆様方にご紹介をさせていただくのを第1部というように考えています。

第2部では、いわゆる教養教育の中で取り組んでいるそのようなプロジェクト学習が例えば私の専門領

域の中などでも生かせないかというような実験も同時に行っていますので、それもまた皆様方にご紹介できればと思います。私が所属しております国文学科1年生の基礎演習の中でやっております。いわゆる初年次教育の中でこのようなPBLが生かせるようなシチュエーションはないのだろうかということで実験をしてまいりました。これも今年で4年目に突入しておりますので、大体のメソッドとしては完成してきたかなと思います。

広い意味で言いますと教養教育と専門教育、それがお互いにいい相乗効果をもたらして、それがPBLという手法によってつながっていく可能性というものもあるのではないかと考えています。ですから、2部立てになっているのですが、狙いとしてはその両方がそのような形で結びついていくことによって、PBLの可能性や課題などを皆様方にお伝えできればいいなと思っています。それが、本日お話をさせていただく大きな流れとなっております。

第1部 教養教育系PBL

それでは、第1部のほうの幕開きということにしたいと思っています。このようなPBLというのは大学と社会と相またがるような教育の手法ですので、社会系・経済・商学、一番典型的なのは医療・看護・情報系など、そのような分野が一般的なのです。ですから、大体その分野のかたが中心になって推進されることが多いのです。私の場合は最も守旧派でございます。国文学ですから、一番遠いのではないかとおもうのですが。最初は私も何か「こんなんでいいのかな」と思っていたのですけれども、いろいろなところでお話をさせていただくときに（理工系の大学から呼ばれることも結構多いのです）、「先生ご所属は？」と、「はい、国文学です」。「ええっ」というように思われるのですが、それも面白いなと思って、そのような違和感を楽しみながらやっております。

前置きが長くなりましたが、同志社大学では2006年度からプロジェクト科目という科目を開講しています。まず、その科目は一体どのようなものなのかということをご紹介したいと思います。NHKで「プロジェクトX」などいうのがありましたけれども、そのような「プロジェクトX」の学生版ができれば面白いのではないかというようなことが最初に思っていたことなのです。そして、試行錯誤を重ねる中でいろいろアイデアをかたちにしてきました。その経緯を少し紹介します。

プロジェクト科目設置の経緯

まず、すぐお隣の建物ですが、同志社大学ローム記念館というのがございます。2003年9月に完成いたしました。その中で一体何をやるのだというような検討が、その前からずっと行われてきました。そのときに、一体何をどのように進めればいいのかということで、いろいろな提案をいたしました。それで、マスタープランを作ったりしながら、2004年度からローム記念館プロジェクトというのが課外活動としてスタートしました。これは同志社大学として組織的に取り組んでいったPBLの最初ということになるわけです。学校法人同志社としても初めての試みでした。私も立ち上げのメンバーです。

それで、せっかくやったのだから現代GPのほうに応募してみようかということになりました。それが、「プロジェクト主義教育による人材育成」でした。このときに初めて「プロジェクト」という言葉を使ったということになります。これが無事採択されました。私はその中の、いわば正課授業化の可能性を探るというパートを担当してまして、2004年度に、それと同時に文学部のほうでプロジェクト科目が正課授業としてできるかできないかという試行実験をやってみました。これは文学部長が、「面白いからやってみないか」と言ってくれたので、文学部の共通選択科目として、特殊演習（文学部プロジェクト科目）を開講しました。ですから、2004年度に課外活動としてのプロジェクト、それから文学部共通選択科目としてのプロジェクト、という二つを走らせることによって、正課授業と課外活動の両方におけるPBLの可能性について模索しました。

その結果として、2006年に、いよいよそれを正課授業化の軌道に乗せていこうということになって、そ

のときに全学共通教養教育科目の再編が同志社大学の中で行われていました。つまり、旧3分野というように言われる領域のものだけではなくて、もう一度同志社大学における教養とは何なのだろうということ問い直すという時期がありまして、ちょうどそのときに、当時の教務部長といろいろ話を詰めながら、その可能性についてだいたい議論しました。その一つの潮流の中で、プロジェクト科目の持っている教育力の可能性について、大学も注目したということになります。それで、実際にスタートいたしました。

先程と同じなのですが、せっかくスタートさせたのだから、現代GPのほうに応募してみようではないかということになって、「公募制のプロジェクト科目による地域活性化」というタイトルで応募しました。その結果、無事採択されまして、今度は組織的に研究会などもやりながら進めてきました。それが2008年3月に終了しました。そして、2009年に再スタートするのですが、そのときにちょうど教養教育の中でもプロジェクト科目を、キャリア形成支援科目群に位置づけるということもあり、では、教養教育の中で一体何ができるのかということ、今度は真正面から取り上げて考えてみようということになったわけです。それが2009年度の大学教育推進プログラムに、「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育」ということで応募し、それも何とか無事に採択されました。

そして、2009年11月からPBL推進支援センターを立ち上げまして、実際に協議会（研究会）あるいは普及のための様々な企画を行って、今年3月に終了したということです。それ以後は、今やっていたような内容のものを少し圧縮し、定着事業としてほぼ大学の予算で走らせるということで今日に至っています。いわば、このような新しい学びのスタイルが、大学教育の中にどのように位置づけられていくべきなのかという議論を巻き起こすことにもなったのかもしれない。

PBLとは何か？

まず大前提として、PBLとは一体何なのかということ定義づけておかないと、このような活動というのは結局できないものですから、われわれとしての定義をしました。それがここに書いたものです。簡単に見ていきたいと思います。「一定の期間の中で必ず一定の目標を実現しなければならない」。これが命題です。そのためには、「学生が自立的・主体的に取り組んで」もらわなければならない。彼らが「発見した問題に取り組んで、それを解決しよう」と試みてもらうこと、それを「個人あるいはチームで協働して取り組んでいく」という要件が必要になる。その学びはあくまで「創造的で社会的な学び」でなければならない。つまり、二番煎じ、三番煎じをやるのではなくて、何か自分たちがこれを社会に向けて問いかけたり発信したりしていく、そのようなエネルギーを持たなければならないというような学びのスタイルを、われわれは「PBL」ととらえています。

それを一番分かりやすく、例えば授業の中に落とし込んでいけばこのようなことになります。プロジェクトには、必ず一定の制約がございます。社会に向けていろいろなことを発信していくためには、当然のことながら自分たちがいろいろな未知の分野について勉強していかなければなりません。そして、実際に調査に出かけ、いろいろなかたとお話をさせていただいて、いろいろな関わりを見つけていくというようなことをしなければなりません。そこで、期限とか予算とかメンバー数とか活動の実態とか、いろいろな制約が生まれます。教員はそこではガイド役に徹してもらいます。あくまで学生が主役です。学生自身が学びをコントロールしていくということです。学びをコントロールするのは教師の役割だということ考えられますが、いやいや、学び方や学びをコントロールするのは学生だという考え方です。その意味で学生が主人公だという考え方を持っています。

ちなみに、職員も同様で、職員はその学生の活動を支援していく役割です。ですから、このようなものもあります、このようなこともできます、このようなこともやろうと思ったらできるのではないかというように、そのようなりソースを学生たちに伝えていく、あるいは担当の先生方に伝えていく、そのようにして職員は学生や教員のサポートをしていくという役割です。PBLをやっていると、どうしても学生と教員と職員が一体になっていかざるをえないという側面がございます。それを私たちは、「日々FD」

というように呼んでいます、そのような活動になっていかざるをえないのだということです。

そのようなPBLなのですが、プロジェクトとして走らせていくと、実にいろいろな多様性を持っているということがわかってきます。このことを記憶に留めておいていただきたいと思います。例えば、テーマにしても、対象年次にしても、カリキュラムの位置づけにしても、実施されている学部やセンターによって全然違う形を取ります。専門教育の中では、なおかつ学部であったり大学院であったり、その運用の仕方もそれによって、それぞれ変わってきます。おもしろいことに、先程申し上げたような形の一つの概念規定に合う授業というのは、それと意識されずにすでに開講・運用されているケースがあるのです。そこで、私たちは4年前か5年前ぐらいに全学の中で、「PBLと思いが当たるものを行っていると思うところは手を挙げてください」と教務部長から言っていたいただいて、「はい」と手を挙げていただいたところを、私と当時の教務係長と一緒に調査をして回りました。全学行脚をしたわけです。そして15拠点で、実はPBLをやっているということが分かってきました。このようなことをすることによって、自分たちがやっているのはPBLなのだということに、工学部の先生でさえはじめてお気づきになるというケースが出てきました。そのような意味で言いますと、文系であるか理系であるかというのは問題になりません。むしろ、PBLは、小学校でも、中学校でも、高校でも、大学でも、大学院でもできるという考え方を持っています。

PBL 導入の契機

どうしてわれわれがPBLを導入しようと思ったのかといえば、やはり学生さんの一つの変化に関わっています。基本的に教育は学生に応じてなされていかなければなりませんので、では一体現状はどのようなだろうというようによく考えてみると、同志社大学の学生は、情報処理能力は結構高いのですが、新しい課題などを設定する力が、やはりそれに比べると弱いです。テクニクやノウハウに関してはわりと長けているのですが、未知未決の問題になってくると、なかなか取り組みにくいし、一歩前に踏み出すことを躊躇しがちです。その意味で言いますと、チャートなき事柄に関して自分で取り組んで徹底的に考え抜くという力が、総じて、弱いのではないかと。それで、PBLの導入を考えました。PBLは、先程申し上げたように、非常に多様な学びが可能ですし、地域との関わりをものすごく持ってきますから、実際にやってみて、その中でいろいろな体験をし、その体験を通して学んでいくというようなことができます。課題を自ら発見し、解決していく能力を養うのには最適な教育手法ではないかと考えるに至りました。

結局教養というのは、そのような意味での課題を自ら見つけて、それを解決していくような力、それから、実際に社会で活躍していくために有効な、有用な、つまり、生涯自分がずっと学び続けていく学び方の基本のようなものをそこで学ぶことが一番大事なのではないかと考えるに至りました。それを個人でやるのではなくて、チームでやっていきます。そのことによって多様な価値観と出会いながら、自分の考え方を相対化していくことができる、そのような人間形成ができるのではないかと。これは仮説です。まだ証明されたわけではありません。そうしたプロセスで、プロジェクト・リテラシーの形成というようなことがあるのではないかと想定しました。要するに、今現在の社会の職場の中でも、やはりプロジェクトベースで仕事をしていくことが多いので、プロジェクトの特性とは何だろう、プロジェクトをうまく運営していくために必要な諸能力を組み合わせさせて使っていくことによって、効率的・効果的にプロジェクトを推進していくような力を身につけられないかと考えました。そのような力を局面、局面において自ら駆使して、仲間と一緒に協働していくというようなことができれば、そのような能力を身につけることができるのではないかと。同時にそうした能力をしっかりと運用できるようなモラルを備えた人物像を養成したいということです。それを私たちは仮に「プロジェクト・リテラシーの形成」と呼んでいます。

プロジェクト科目の授業

では、実際に2006年から開講してきましたプロジェクト科目というものがどのように履修されているの

かをご紹介させていただきます。

ここで見ていただきたいのは、男女比であるとか、2年生・3年生・4年生の数、それから学部のばらつき具合です。毎年、それほど変化はありません。4年生も履修しています。それから、学部も偏らないのです。男女も半々ぐらいです。ここで、どのような現象が起こるかと言いますと、初回の授業へまいりますと、顔見知りは一ひとりもいないのです。やりたいことを選んでいるのです。あとで申し上げますが、大体25科目前後ぐらいありまして、自分の好きなものを選択しますから、仲間と連れだって登録するというのはないのです。ですから、初対面の学生が、本当に一からコミュニケーションを積み上げていって、一つの目標に到達していかなければならない、この仕掛けが非常にうまく当たりまして、ずっとこの状態が続いています。

履修中止などというのも1割ぐらいいます。「ええ？それはあかんのちゃう」などと言われるかもしれませんが、それはいいと考えています。つまり、これは選択科目ですし、同時にこのような学び方には、やはり適性というものもあると思いますから、はなから無理という学生もいますし、同時にこの科目は結構ハードです。ハードですから、そこまではできないという学生も出てくるわけです。

このようにプロジェクト科目は、PBLという手法を使っていること、それから教養教育として開講しているのがひとつの特徴です。ここからは、テーマの公募制とか少人数制とか授業運営費の問題などについて、お話ししたいと思います。

公募制と少人数クラス

このようなアクティブな科目を成功させるためには、それなりの工夫と仕掛け・仕組みづくりが必要になってくるといことになります。これがプロジェクト科目の公募制というシステムです。皆様方のお手元の中にも、パンフレットが入っているかもしれません。これは、企業であったり、役所であったり、あるいはNPO、NGO、そのような各種団体であったり個人であったり、そのような人たちに、「このような科目を学生と一緒に担当してもらえませんか」ということで呼びかけまして、それに応えていただくという形です。文字どおりテーマの公募制です。そのために、このような応募書類を作っています。それを書いていただいて審査しています。

審査の体制は、教務主任連絡会議委員とプロジェクト科目運営委員会委員で審査し、その結果に基づいて、プロジェクト科目運営委員会で作成し、それを教務主任連絡会議で決定していきます。要するにいくつかのフィルターを通して、できるだけ客観的に、クリアに、クリーンに選定をしているということです。ここが曖昧になってしまいますと信用がなくなってしまいますので、誰も応募してくれなくなります。実はこの科目をつくるときに一番気を遣ったのは、公募のシステムでした。年間で大体25科目ぐらいです。

応募者の内訳はご覧の通りです。初年だけは187件もあったのですが、これは新聞で取り上げられたときに、「ちょっとお力拝借」のような記事が出たものですから、「何ほでも力貸してやろう」と思われるかたがずいぶんたくさん来たということです。この中にはPBLとは全然関係のないようなものもいっぱいありました。「うん、私の人生を語ろう」など、そのようなものもあったわけです。

ところが、やはり2年目、3年目になってきますと、これはどうも学生が中心になってプロジェクトをやっていくのだということになり、それを教育目標にしたPBL型のテーマが残っていくようになりました。例年、大体70件ぐらいの応募があります。その70件の中から25件程度を選んでいきます。次年度からはそれを絞り込んで20件というように、さらにクオリティを上げるための工夫をしています。

ただ、このように公募をしてみますので、学外の先生方が教壇に立つことになります。大学関係者は、大体「えっ」と思われると思うのです。採択されたのはいいけれども、人件はどうなっているのかという話になるのです。実は、この公募の結果採択されたテーマ提案者を、そのまま教務主任連絡会議で人件審議にかけます。履歴書、業績書に基づき、その人が科目を担当するにふさわしいかどうかということ

をきちんと審査します。そのプロセスを経て、教務主任連絡会議で審査、採択し、それで同志社大学の嘱託講師になってもらうということです。テーマを応募してくださった方に授業を担当していただくと、そのような考え方です。テーマに応募するというかたちなので、大学と社会との関係とか大学と会社との関係とかというようなものが非常にオープンな関係になって、お互いに言いたいことを言うことができるようになります。

それから、少人数制です。これは5名から19名で限定しています。20名には絶対ならないようにしています。5名未満でしたら、いくら公募に通って採択されて嘱託講師と決まっても、不開講になります。つまり、2、3人というのでは社会性を培っていただけの負荷にならないということです。できるだけ負荷を高めていく、ハードルを上げていくというような工夫をしています。

プロジェクト科目をサポートする

それから、これまで申し上げた教養教育科目という科目設置です。先程申し上げたようなことで、1年生の秋から4年生まで、それぞれに取ることができます。それから開講期間としては、春学期2単位の科目で応募される場合、秋学期2単位で応募される場合、春秋連結した場合は4単位ということになっています。授業の実際としては、授業時間というのは意志決定と情報共有の場のようなものです。そして、学生はそれ以外にミーティングを週に1回、2回と繰り返していきますので、結構負荷の高い授業になってきます。

それから、実際にいろいろなところに出かけて行って調査をしたりすることになりますので、1 Semester 30万円の授業運営費というのを出しています。春秋連結でやりますと、60万円の補助をするということになります。使用範囲は細かく規定されています。予算執行の基準はわれわれが決めているわけではありません。大学の経理でチェックを受けます。予算管理は、科目代表者という本学の専任教員がサポートにつきますが、その人が判を押さないと支出できません。ただし、実際に予算に関しての管理は学生がやっています。最終責任は科目代表者の専任教員が取るということになります。

ここからは仕掛けと工夫について少し示します。このような科目の場合には、意識づけということが非常に重要だと私たちは考えています。この科目は当然、複数の科目があって、学生がそこに登録をしていきます。人気のある科目と人気のない科目などがいろいろと出てくるわけです。2人しか集まらなかったら不開講になってしまいます。人気がある場合には選考・面接も行う必要があります、そうしたことも含めて予備登録制をとっています。予備登録をするときに、ただ予備登録をすればいい、あとは抽選で当たるという形ではなくて、志願票というのを400字で書くことが義務づけられています。これを書いた上でないとエントリーができません。その志願票で選考したり、あるいは面接を試みたりして、それで、例えば50~60人がエントリーしても19人しか通りません。ですから、選考で「通った」と思うと、その時点でモチベーションが上がるということになります。ハードルをできるだけ上げるという工夫で、意識づけをしているところです。

それから、このような授業の場合はやったらやりっぱなしのようになってしまふのが一番いけないことであり、そのために春学期、秋学期それぞれに（個々のプロジェクトで成果を出していくのは当たり前ですが）プロジェクト科目の受講生全員が集まって、そこで成果報告会を行うことにしています。そして、自分のプロジェクトについて自己評価をし、他のプロジェクトについて相互評価をします。そして、最優秀賞などを決めていきます。そこで期待しているのは、学生に評価力を身につけさせることなのです。春はこのような形でポスター・セッションをやっています。秋はプレゼンテーション形式でやっています。

授業に関しては、TA・SAの支援が必要になります。必ず各科目に1人つきます。それから、授業運営の手引きのようなものを作っています。学外で活動することも多いので、保険にも入ってもらいます。

担当者には成績評価をしっかりといただいて、最後には成果報告書も出してもらいます。これもなかなかハードなお仕事です。学生たちも成果報告書の記事を書きます。大体1センチぐらいの分厚いものに

なります。担当者も受講生もともに振り返りの機会をしっかりと持つというのがねらいです。

振り返りのために、懇談会なども行っています。これは学生の懇談会です。プロジェクト期間にどのようなことに取り組み、自分たちの一体何が問題なのだろう、今後どのようにしていったらいいのだろうというようなことを議論します。それから、担当者の懇談会も行います。TAやSAの懇談会も行っています。今年からそれを組織的に行うために、TASA協議会と改称しました。

要するに、このような実践的な活動こそがFD的な活動になるのだと思います。私は、何かいろいろな研修を受けたら、自分の授業改善がうまくいくということばかりではないと思っています。このような科目を持つことによって、普段から「このようにしたほうが良かったな」ということを考え、情報交換をしていく場所、そうした場をつくることがとても大事なことではないかと思っています。

それから、一つ一つのプロジェクトを応援するために、いろいろな講習会やワークショップを開催します。それによって、例えばこの科目ではCNSという、SNS型のお互いの学びのコミュニティを充実したものにしていくためのツールとして、また、情報交換ができるようなシステムをつくっています。サービスを提供していると言ったほうがいいでしょうか。それから、リーダーズ講習会とカリテラシー講習会とか会計の講習会とか、最低限必要なことに関しては講習会を開き、出席した代表がしっかりとプロジェクトメンバーに伝えていくという体制をつくっています。現実的にありえないですから、全員集まれというようなことは言いません。その代わり代表が責任を持たないと、「あんたのところのプロジェクトだけ何も知らんということになるよ。大丈夫？」というようなことで圧力はかけます。

各種アンケートはきちんとやります。

それから、資料室は2室用意しています。

機材も貸し出し機材を持っています。それから、印刷補助などもします。

このような日常的な活動のサポートは、プロジェクト科目の事務局が担当しています。

プロジェクト科目の授業の流れ

あと授業の流れも、簡単にさらさらと触れておくぐらいにしたいと思います。授業の主役は学生です。学生が能動的に関わっていかなければなりません。教育の目的は、例えば従来の教養教育が知識の習得や体系化にあるとするならば、知識の総合化・統合化を目指し、いわば応用力を重視しているというように考えていただければと思います。活動の中心は、やはりチームということになってきます。それから、社会とのつながりというのが、やはりかなり濃密になってきます。一般的な講義科目とはこのような違いがあるかと思っています。

プロジェクトの遂行については、ごく一般的な流れかと思っています。いろいろなアイデアを出しあって、それを実際に自分たちで企画書に仕上げ、役割分担をして、計画を立て、それを実行していくというのが一つのプロセスになります。一番最後に、しっかりと振り返りの会を設けるといって、これが一番大事なことを考えています。それを年間の流れで言いますと、仮にフェーズ1、2、3、4、5と決めるならば、1番最初に「決める」といって、これは意志的選択を課しているということです。担当者にも、説明会でそれを喚起し、学生には登録説明会でそれを喚起します。それから、フェーズ2、3、ここは「つかむ」とか「深める」とかいうレベルです。これはいよいよプロジェクトの中身が始まり課題を設定するのに苦勞し、どのような道をたどればいいのかというようなことを検討し、その結果を再度「伝えていく」というフェーズに入り、最後に「振り返る」と、このような形になります。

2011年度、去年はどのような流れだったかというのはここに掲げました。それをさっと実際の授業風景に即して見ていただきます。ここからは皆様のプリントにはないと思います。「決める」というときには、このような登録の説明会などが行われていくということです。これが登録志願票です。そして、「つかむ」「深める」というレベルになりますと、そのときに学生さんたちが、それぞれのプロジェクトでいろいろな問題や知識を与えられながら、自分たちで考えていくというときに、それをサポートするようなワーク

シヨップや自分たちのツールについての説明会、会計の説明会などをずっと行っていきます。そして、それぞれのプロジェクトでは、ゲストスピーカーから知識を得たり、フィールドワークをしてみたり、市場調査をしてみたり、それから、リサーチ、分析を重ねていきながら自分たちのテーマを明確化していくということになります。そして、最終的に自分たちの成果を、やはり現場に還元していく、あるいは社会へ還元していくという「伝える」という段階になります。いろいろなイベントを企画したり、提案をしてみたり、そのような報告書を作ってみたりするような、様々なアウトプットが生まれてまいります。



「振り返る」という段階では、先程申し上げたように、自分たちがやったプロジェクトの成果を他のプロジェクトと比較検証していく相互評価の場として成果報告会を行っています。その場限りにするのではなく、表彰された優秀なプロジェクトのなかから、シンポジウムのテーマに合致するようなものは、シンポジウムで発表してもらいます。

ちなみに、私たちは基本的に、「成果は何ですか」というように問われたら、「学生です」と答えます。ですから、どのような学生に育ったのかというのは、学生さんたちに発表してもらい、あるいは質疑応答にきっちり答えてもらう、そのような中で、学生が本当にどのように育ったのかということは自ずと証明されるのだというように考えています。そのために、他大学との他流試合もやっています。このようにすることによって自分たちの活動の特性を知ることができます。昨年からは教育フォーラムというのを独自企画でスタートさせました。去年は5大学に集まってもらって、学生が発表し、質疑に答え、さらに学生が一定のテーマに基づいてパネルディスカッションを行い、議論を彼ら自身が回していくという、そのような企画もやりました。これもかなり好評でした。

「振り返り」のフェーズになりますと、先程申し上げたように、学生同士の振り返りですが、特徴としては、みんな非常にさわやかな顔でやります。かなり嫌な思い出を語ったりするときもさわやかです。必ずしも恵まれた環境ではありません。われわれは、「恵まれない環境を与えられた場合には、恵まれる環境に変えなさい」というように言っているので、「自分たちが集まってやる以上は自分たちのコミュニティを育てていくということが一番大事です。結局面白くなかったとするならば、それはあなたたちの責任です」と、ある意味では無責任な対応なのかもしれませんが、これでよいと考えています。コミュニティを成熟させることができたなら、そのプロジェクトは絶対成功します。そのためには、担当者も振り返ってもらう必要があります。TA・SAも振り返ってもらう必要があります。つまり、プロジェクトに関わる全員が自己評価・相互評価するような体制を持つことが重要です。

ここで、学生達の履修の動機を見てみますと、ご覧の通り、このようにいろいろです。「何か面白そやな」という感じです。履修後の感じは、先程申し上げたことと関係するのですが、年齢もバラバラ、学部もバラバラ、男女比も半々です。ですから、いろいろな価値観を持っている人たちと出会うことができるということです。刺激を受けるということです。その中で、「あ、こういうことだね」「こういうことだな」といろいろなことを発見していくということが非常によく分かると思います。一番面白いのは、一番最後です。「専門の必要性が分かった」。教養科目で専門の必要性が分かったという気持ちは素晴らしいと思うのです。専門の知識やスキルがプロジェクトの活動を通して実践的な課題と関連づけることができるということが、大学における総合的な学びの重要なファクターだと考えています。

プロジェクト科目の事例紹介

ちょっと事例を2、3紹介したいと思います。

例えばこれは企業などと一緒にジョイントしたものです。リカちゃん人形で有名なタカラトミーが担当したものです。廉価版の、1万円もしない3Dが撮れるカメラというのを学生が発案しまして、面白いと言ってタカラトミーが商品開発したら、ギフトショーで800件ぐらい出ている中で最優秀賞を獲得しました。今、世界的に売れているようです。つまり、企業の一つのニーズとしては、そのようなアイデアがそのまま生きるという場合もあるということです。

それから、おたべさんのところでも、そのような商品開発が出てきました。

これは呉服の丸池藤井さんが担当した着物のプロジェクトです。学生がいろいろと工夫をしてマーケットリサーチなどをしながら、どうしたら着物が普及するのかなというような課題について考えました。

それから、これは読売新聞でしたか、そのような活動のことを「同志社大学の教育力」いう特集で、第1回目にわれわれのプロジェクト科目が取り上げられたということです。その中で学生さんたちが、自分なりにいろいろなことを学んだということが分かります。ここで学んだことが、卒業論文につながったという学生もいますし、ここで学んだことによって自分の進路が変わったという学生もいます。

これは京都の情報誌で、『京都CF!』というのがあって、その前編集長が担当者になりました。その折り込みで、「京都を逍遙してみよう」というような冊子を作成しました。これは大体6万部から7万部ぐらい出ていますから、ずいぶんたくさんの人に読まれたようです。

あとは、京田辺キャンパスのすぐ近くに同志社山手がありますので、そこをどのような街にしていけばいいのかなという街づくりプランについて検討したプロジェクトなど、社会と連携しながら、いろいろな取り組みを行ってきました。

プロジェクト科目では、いろいろなテーマを公募しているものですから、いろいろな形で、多くの視点を与えてくれるような多様なテーマを学生に与えることができます。教育は、やはり鮮度のいい教材を与えるということが何よりかなと思います。その意味で言えば、本当に鮮度のよろしい教材ばかりがたくさん並んでいるわけですから、履修する学生たちからすれば、楽しいと思いますよ。

それから、このようなNPOなどとの連携の中で、障がい者のホームはどうあるべきなのかなということ問い直すというようなプロジェクトもあります。

教育関係でもいろいろあります。これは小学校3年生に能を体験させるという一見無謀なプロジェクトです。しかし、伝統芸能は敷居が高いと思い込んでいるのは大人の方であって、児童はそのような常識を見事に覆しました。これは私が提案してやったものですが、なかなか高い評価を受けました。

また、これは、「京都職場図鑑」という小学校で使う副教材を作成したプロジェクトです。これは、京都の伝統的な職人さんの職業を紹介するというものです。同志社小学校の先生方と連携しながらそれやってみたということです。学生たちが「千家十職」を訪ねて行くわけですが、ここにいらっしゃるのは大西清右衛門さんです。それから、これは中村宗哲さんですね。私たちが行ってもなかなか取材しにくいのですが、これは学生さんの特権ですね。職場に絶対入れないのに、なぜ学生だったら職場を取材させるのだというような嫉妬心をちょっとかき立てられたりするのですが、そうした取材を行っています。それで、小学校の授業で使える教材作成をしました。3年生の児童が読めるようにルビをつけたり、いろいろな工夫をしました。このテキストは写真やイラストを多用していますが、フォトショップなど使ったことのない学生たちばかりでした。それが、スタジオにこもって、短期間で完成させたというものです。もちろんイラストレーターなどをいろいろ駆使して作っています。京都にはどのような伝統産業があり、どのような職業があるのか、それから、伝統的な職人さんの職場の地図などを作ったりして、結局、総合的学習の時間に使ってもらおうというわけです。

これを作った学生がこのようなことを言っていました。シンポジウムで発表したときにフロアのほうから質問が出たのです。「何があなたたちの最終ゴールなのですか?」と聞かれたときに、これを作ってい

た学生が、「私たちの最終ゴールは、これを作ることはありません。これを使って授業をしていただくことです。これが私たちの最終ゴールです」と答えました。「おー」と思って、何か会場がしんと静まり返ったのを今も覚えているのですが、そのようなところまで見通せる学生というのは素晴らしいと、私は思いました。

それから、これも小学校との事例です。エピソードを一つお話ししますと、これは、朱雀第2小学校との連携がちょっと面白いのです。環境問題を扱った劇を作るというプロジェクトです。大学生がサポートして、小学生が、大道具も小道具も全部自分たちで作りまして、シナリオも、小学生が自分たちで作るわけです。最終的には、ご父母のかたがたの前で学年を超えて上演したら、非常に反応がよかったのです。学生らはもう、「やった！」です。これがうまいこといったものですから、たまたまそのテーマが2年連続続きましたので、次の学年がまた同じ朱雀第2小学校に行ったのです。「去年もやりましたが、今年もっとバージョンアップして頑張ります」と言ったら、小学校に断られたのです。「えーっ」と思ったらしいのですが、なぜなのかと言いますと、「あまりに良かったので学校行事にしました」。つまり、どう進めたらいいのかノウハウもすべて、担任の先生や、その周辺にいる先生方に、学生らは伝授しているのです。そうすると先生方は、「面白そうやから私らやるわ」と言って学校行事になってしまいました。実におもしろい。これが1年限りでやるときの「定着」の意味なのだということを、私は学生に教えられました。地域連携などで継続性が話題になりますが、ただ継続すればいいのではないのです。定着するというのはそのようなことだということを教わりました。私たちは学生から多くのことを学んでいることになりました。

さて、そこで少しまとめのお話をします。PBLで何が学生を成長させるのかということになりますと、いくつかの要素を挙げることができます。一つは、学生自らがそれをつくり上げていく授業だということです。「来週、何するの？」というのも、学生が決めないと進みません。そこでは、教員は教えすぎないということです。悩むチャンス、これを与えるためです。どんどん教える先生がいます。あれをやってしまいますと、悩む時間を学生からどんどん奪っているのです。とんでもないことだと思います。

それから、1人1人にタスクを与えます。役割を与えられたら、みんなものすごく勢いづくのです。その代わり、納得した役割でなければいけません。多様な異年齢集団との関わり、これがポイントです。それから、適度な競争原理です。「最優秀賞、取ったるか」という気概です。それから、学生同士の学び合いです。教師が与えるだけでなく、いいことを知ったら、それを他の学生に教えていくということです。また、失敗しても、そこから何が悪かったのかを学びます。失敗するゆとりを授業展開の中に組み込むことが大切です。それから、発表の場と振り返りの場をしっかりと提供していきます。アウトプットとプロセスの両面をしっかりと評価していくことです。デジタル・ポートフォリオをしっかりと整備して、学生がしっかりと情報共有していくことができるように整備することも重要でしょう。

最後に、私たちはこのような活動を学内外で進めてきています。そのためにPBL推進支援センターを設置しました。要するに、PBLに関心をお持ちいただけるようなかたがたと一緒に手を取り合っていきましょうというネットワークづくりをしています。そして、その教育方法に磨きをかけていきます。それをお互いに共有しあって、事例報告をしあうことによって教育の質を高めていこうという趣旨です。それから、いろいろな講習会を開いて社会に発信していきます。年に2回、GPの期間が終わりましたので年に1回、2月ですけれども、必ず今後も続けていくことになります。それから、他流試合をしていきます。先程申し上げたように、教育フォーラムというのをやって他流試合をしてもらっています。

そして一番大事なことは、このような活動というのは、できるだけ公開していくということです。われわれの活動の詳細は、同志社大学のホームページのトップページに設けたプロジェクト科目のバナーをクリックしていただいたら、もう9割以上の情報とノウハウをご紹介します。そうしないと多くの教育機関と意見交換ができないのです。そのために刊行物も、プロジェクト科目関連でこのようなものを出しています。センターからも、その活動成果を公刊しています。こうしたセンターの活動も、やはり外部評

価を受ける必要があります。そこで外部評価委員として3名お願いしていて、京都市長の門川さんが、行政の側から、経済同友会のほうからは代表幹事のかたに経済界を代表するような形でお願いしています。大学のほうは、東京電機大学の中村先生にお願いしています。全体としては、このような組織で取り組んでおります。PBL 関連の組織づくりと、こまかな一つ一つの教育改善を積み重ねながら、試行錯誤を繰り返して、学生さんの動きに応じながら日々アップデートしていくというのが、私たちの役割です。

第2部 専門教育系 PBL

ここから第2部のほうへ入っていきたいと思います。

さて、このようなPBLを積み重ねておりますと、自分でも何となく、これは他の専門科目でもできるのではないかという気になってしまったのです。やってみたら案外うまくいったような気がするのです。それをご紹介します。

PBLと専門教育、とりわけ初年次教育ということです。私が担当しております日本文学基礎演習の6クラスあるうちの2クラスで実施しているものです。

それで試していることは一体何かと言うと、評価力を鍛えるプログラムです。先程申し上げました、このようなプロジェクトをやっていく場合に、一番大事なのは、自己評価と相互評価ということになります。どれだけ自己評価の精度を上げられるか、これにかかっています。なぜならば、私たちは学生がどのような勉強をしているのかというのを、全方位的に把握することはできません。個人学習をしているところも分からないのです。ミーティングをしている実態は、なかなか分かりません。なぜならば、私たちはそのようなところに全部立ち会うことはできませんし、立ち会ってしまったら悩む時間を奪うことになりすから、そこまで口を出すことはいけないことです。そうなりますと、自分自身の学びのプロセスを把握しているのは本人だけです。その本人がいかに自分自身の活動を評価できるかというのが大事なのです。

ここでは、学生は評価される客体ではありません。評価する主体としての学生と考えるということです。自己評価と相互評価、その中で自分自身を正しく評価できるようにするために、毎日の繰り返しの中で持続的な評価活動を体験させてみようということです。このような力、課題発見・解決学習を積み重ねていく中で評価力を鍛えていくことができないか。それから、個人学習からチーム学習に移っていくことで人と比較することができるようになります。また、失敗することを実際に実行していくことによって、何がまずかったのかということを理解し、自己評価していきます。インプットよりもアウトプットを重視しましょう、プロセスを大事にしましょう、というようなことなのです。ただ、そのときにはしっかりした記録がなければ振り返ることはできませんので、それを丹念にやってほしいということです。ところが、学生は記録を取るのはいくらでも好きではないのです。でも、ちょっと記録をとらないと人に悪いな、というような雰囲気をつくるのが大事だと思います。雰囲気だけではなくて、システムをつくるということです。

学生が何か評価するという場合、学生FDなどいろいろありますが、身近なのは授業評価アンケートでしょう。ただし、この回収率の悪さは素晴らしいものがあります。web版のほうに変えてしまいますと、その回収率たるや、全国平均約3%と言われております。これをどう受け止めるべきか。やり方がまずいのでしょうか、いや、「評価するような教育を受けてない人間に評価せいというのはむちゃと違う？」と学生が言っているのかもしれない。幼稚園から小学校・中学校・高校を通して、評価力を鍛えるなどというプログラムを受けたことがないのです。その人間に向かって、いきなり、「授業評価しろ」と言われても困ってしまいます、ということではないかと私は思っています。別に学生の肩を持つつもりはないのですが、多分そうだろうと思います。ならば、「やはり評価力を鍛えるプログラムはあるのではないか」と思うわけです。同時に、今から現代社会の中で生きていこうと思ったら、「本当にこれは信用していいのか」や、「これは本当にその選択肢でいいのか」とかというような、選択肢の幅を持って批判的に選択するということができているのでしょうか。たまたまそこにあったからそれをやっているだけではないか、

それでは困ります。それを何とかしたいなと思いました。そこにPBLの有効性があるのではないかと思います。

日本文学基礎演習の概要

授業のバックボーンはこのようなことです。国文学科は120人。初年次教育としてやっているのは、日本文学、6クラスあります。私たちは春、秋で別々の教師が担当することになります。ですから、私もAかDかというように、春と秋でそれぞれ別のクラスを持つような形になります。ですから、1セメスターしか持たないのです。それぞれ別のクラスを担当しています(これは人材養成目的です。型どおりなので、あとで読んでおいてください。自分で書いたもので、これを読み上げるのはちょっと恥ずかしいのです。今一応学則にも載っているのですが、あとで読んでおいてください)。

ここからは到達目標のようなことです。一応このようなことを決めています。これは全体的に大体了解されていることだと思います。何を学ぶのかということを読んでもらうということです。研究入門、表現の面白さ、勉強の楽しさ、自発的学習力の誘発、ゼミで学ぶとはこのようなことだと、議論と対話の面白さを味わってもらう、それから、いかに学ぶかということでチーム学習へと意識を変えましょう、それから、課題が提示されたものを学ぶのではなくて、自ら課題を発見してみましょう、というようなことです。このように話しながら、非常に当たり前のことを言っているだけで、奇抜なことは全然やっていません。

基礎演習の最初に習得してほしいスキルを説明します。このようなものです。文献検索、文章表現力、文章読解力、情報リテラシー、コミュニケーション力やプレゼンテーション力、リーダーシップ、サポートシップ、「これらの運用能力を重視します」と宣言しています。

教材としての『仮名手本忠臣蔵』

担当クラスでは、テキストが『仮名手本忠臣蔵』です。しかも、『仮名手本忠臣蔵』の検定問題づくりを行う授業です。検定問題というのはいかにも時流に乗りすぎではないかという感じがするのですが、ねらいを説明しておきます。検定問題の作成を通して、回答者から出題者へ移行するということです。読者から作者に移ってもらうということです。それは、受け手から作り手へ、立場や視点の転換を図るということです。誰が解くのかを意識しないと問題を作れません。評価される立場から、他の人がどれくらいできたのか、自分が評価するというように立場が移るということです。与えられる教材ではなくて、自分で教材を作るということです。

なぜ『忠臣蔵』なのでしょう。学生に聞きますと、「話では聞いたことがある」、「テレビや映画で見たような気がする。しかし、原作は読んだことがない」。何と素晴らしいことでしょうか。知っているのだが、読んだことはないのです。未知と既知のバランスが取れているということです。これがポイントかなと思っています。そしてその中には、多様な人物が出てきます。恋もあれば、当然史実上は赤穂浪士事件ですから、最後はかたきを討つわけです。そこまでの艱難辛苦、いろいろな家族が出てくるわけです。忠義もあれば、人を欺くこともあれば、恋もあれば、親子愛もあれば、いろいろな人物が群像として出てきますので、好きな人物がどこかにいるので、教材として優れています。

基礎演習 PBL の流れ

先程、プロジェクト科目で言いましたが、最初の意識づけがきわめて重要です。最初のチーム編成もきわめて重要です。そこで第1回目に授業のねらいを説明します。2回目でいきなりチームを作ります。そのために、1週間で『仮名手本忠臣蔵』を読んでこななければならないのです。大体「ええ！」と衝撃を受けます。でも「読んでこなかったらチームに加われないなあ」というようなことを私は言うだけです。ソフトな脅しですね。

2回目には、実際に集まって、何をやりたいかを30秒で宣言していきます。その宣言したものにに基づい

てチームを作っていきます。「意志的選択」と名づけていますが、チームを決めて、ルールを決めて、役割を決めて、そして課題を設定していきます。個人の課題なども決めて、スケジュールも決めて、2回目に全部やります。3回目に参考文献を提示して、サンプルを示して、これから何を学ぶのかということについて具体的にレクチャーします。7回目か8回目あたりに、必ず中間発表をします。ここでは、本番の問題・回答・参考文献よりは少し簡単に、これをA4、1枚にまとめるように指示しています。ここでのポイントは、小さな成功・失敗体験です。

五つぐらいのチームでやったら、大体悲惨なチームが一つは出るのです。僕は絶対怒らないです。四つを見たあとにそれを一つやりますと、もう惨めで、惨めで不細工極まりないのです。勝手に恐縮しますので、怒鳴るよりも、いいやつを並べるほうがよっぽどいいのです。それから心を入れ替えて学ぶようになります。

最後は、最終成果報告会というのをやります。ここで評価表をつけながら他の人の評価をします。五チームそれぞれにどれだけどこが優れているかということの評価させるわけです。詳細はあとで説明します。最後に振り返り会をやります。振り返り会というのは何か言いますと、自分の成績を自分が決める、いわば成績会議です。もちろん、私は成績評価することを放棄してはおりません。自己評価が妥当であるかどうかを聞かせてもらうわけです。それを1時間、たっぷり取ってあります。最後は評価表や振り返りのなかで気づいた点を盛り込んだレポートとして完成形を出してもらいます。

授業時間内のミーティングは20分か、30分単位で小刻みに設定しています。これは、「授業時間内に90分間使ってミーティングをしたらいい」というように最初はしていたのですが、これではだめでした。なぜかと言うと、授業時間内で完結してしまうのです。そうすると、授業外に集まったり調べたりする必要がないのです。そこでイヤミなこと山田タイムというのが設けられているのです。プロジェクトを成功させるにはどうすればいいかという話をするのです。あるいは、「同志社のクリスマスツリーがあるね。あれは実は僕が提案したのだよ」というような話をして、どのようにしたからそれが実現したのか話をするのです。授業と直接関係のない話です。それをして、そこに時間を割くのです。そうすると、ミーティングせざるをえないわけです。授業時間外に必ず週1回のミーティングをせざるをえなくなります。それ以外に随時、個人学習をしていきます。ミーティングをしたら議事録を必ずアップします。個人学習の成果は、毎週の活動記録で示さなければいけません。そのデータを、学習支援のSNSに必ずアップデートします。そして、すべての情報にメンバーがコメントをつけます。そして情報共有と時間管理、それが目的だということをきちんと伝えます。

最初の授業

最初の授業では、このような授業のねらいを説明しています。どのような点を評価しようとしているか、どのようなものを目指してもらいたいかを、第1回目に説明いたします（皆さん方のプリントにあるとおりです）。そして、1人1人にはこのような力を身につけてもらいたいということも、最初のところできちんと伝えます。自己評価するときにはこのようなことが指標になるという参考の指標を、このような疑問形にして提示しています。

実はこうした細かな条件設定は、案外大事だと思います。最初の意識づけと目標を明確にすること、そして、それに向かって自分たちの学びを深めていくということです。ただ、「これをしなさい」という強制はいいしません。

ちなみに、今やっている授業の環境・条件をさっさとご説明してみましよう（ここからスライドを用いて説明しています）。これは実際の教室です。50畳の板間の部屋があって、25畳の和室があって、25畳の土間スペースがあって、全部で100畳の教室でやっています。ちなみに、これは私が設計・提案した教室です。ゴテゴテしている教室はいらぬのです。何も無いのが一番です。柔軟性に富んだ和の空間の素晴らしさというのがそこにあります。もう、見てもらったら分かります。机が部屋の片隅に積んであります。寺子

屋のようです。一人用の机をこのように積んでおいて、自分らが持ってきてそこに座って勉強を始めたら、それがあなたの居場所だということになっています。

最初に先程のようなレクチャーをします。チームを決めましょう。そのときにちょっと仲良くなるようなワークショップをやります。2回目には、これでチームを決定するために、先程言った30秒スピーチをしているところです。チームを決めます。テーマに基づいてわっと寄っていきます。何もないので、すぐに移動がしやすいです。チームが決まったらこのように座っていいのです。どこが決まっていないか一目瞭然です。非常に分かりやすく、この方式はチーム決めに効果的です。

チームが決まったら、すぐにルール決め、役割決めを全部やってしまいます。そして、どのようなルールでやるかというのを、リーダーが全部宣言していきます。

これが、参考文献を提示、サンプルを提示しているところです。ここは土間スペースで、広い机の上に、サンプルを置いています。でも、先輩のサンプルを持ち帰ったり、それをプリント配布することは絶対にしません。それを真似しますから、見るだけです。記憶にとどめるだけです。最近の先生方はプリントを配りすぎます。配りすぎること、学生の考える創造性を奪っているのです。私は、これはまずいことだと思っています。小学校でもそのような傾向があります。持って帰られませんか、ずいぶん熱心に見ていますよ。

これは発表しているところ、こちらは質問しているところです。

最終授業

最終発表を聞きながら彼らは何かうつむいています。これは、実は評価表を彼らは書いているのです。設問（選択肢の適切さ、メッセージ性）、解説（素材のまとめ方、レジュメの作り方）、プレゼンテーション（時間配分、口頭発表の仕方）と、それを全部5段階評価します。「よかったところ」「アドバイス」は記述式です。評価しながら発表を聞いて、問題を解いて、一言コメントをつける、この作業を同時にしないといけないということです。基本的に寝ている間がありません。ただ、最後に5分だけ時間を与えてコメントを書かせるようにはしています。あつという間に発表は終わります。もう25分くらいで一つの発表が終わりますから、効率がいいです。三つやろうと思ったらできるのです。

これもハードルを上げるということです。ただ聞いていたらいいという環境とは違います。聞きながら書きながら考えなければならないという、ハードルを上げれば上げるほど学びます。チームでやらせるときには、無理難題を自分たちに設定させるのが一番です。最初彼らは簡単なことだと思っているのですが、だんだんそれが非常に難しいことだということに気づき始めて、そこで悩みます。これが面白いところです。

これは振り返りをやっているところです。お互いの自己評価を検討しているところです。実は今日はシートを配っていませんが、最後の授業のときにお互いに評価しあうのですが、そのときには、「あなたはこのプロジェクトに総計何時間費やしましたか」や、「あなたにとってこのプロジェクトは今後の人生にどのような影響をあたえると考えますか」、「あなたはもう1回このプロジェクトをやるとすればどういう点に注意しますか」、「あなたは自分たちのチームは何点と評価しますか、100点満点」、「自分自身の活動は何点と評価しますか、100点満点」などというのをやらせます。それをお互いに記入してSNSにアップしておき、当日はSNSからダウンロードしたものを持ってくるのです。その場でお互いに交換しあって、「おまえの点数、これ、高すぎるやろう」というような話があるのです。「このあなたの活動状況から見たら、この点数は甘いんちゃう」というような相互評価をさせるのです。何回もやらせます。そのうちにだんだん妥当な自己評価の点数になっていきます。過大評価も、過小評価もいけないわけです。ここが、評価力がついたかどうかの最後の証の場面です。だから、最終回の15回目の授業はとても重要と考えています。

実はPBLというのは、このように振り返りを重視しながら評価していくということがとても大事なこ

とです。この評価力を身につけるといことが、実はプロジェクト学習にとっては重要なことではないかと思ひます。

これは先程最後に申し上げたことです。「あなたたちがコミュニティを成熟させればプロジェクトは成功しますよ」という話です。学生は大体、仲間のコミュニティからスタートします。おしゃべり集団です。学びのコミュニティで勉強会を形成するようになります。チームのコミュニティが成熟して目的が共有されたときに、プロジェクトになっていきます。自己啓発から、親愛・愛着を持つような関係をつくり、そして自己発見をし、他の人と一緒に勉強してみても同期・同調の必要性も感じます。そして、やっと「ああ、私ってこんなタイプね」ということを発見して、自分自身の視点から問題を再構築していきます。協働・協調の必要性のもとに学びを深めていくことができます。これがPBLの特性です。そのためにはポートフォリオがきわめて重要です。

PBLでは、自分自身で、どこが今週はいけなかったのかなというのを毎週振り返ります。個人、チームの両方のリフレクションとフィードバックを大事にすること。それによって、チームへの帰属意識とか、チームでどうするべきかということだだん学習していきます。そして、メンバー間の信頼と期待に応えようとするこことで、協調学習の素晴らしさに気づいていきます。お互いに心を許せるようになって議論が弾むようになります。いきなり議論しろというのは、これは無理です。心を許せる相手かどうか分からない人に向かつて議論をふっかけるということではできません。

それで、このようなデータも取っていきます。中間投稿率がどれくらいなのか、このようなことです。これなども、実は全部TAが作ってくれてあります。このようにグラフ化もして、数値化していったデータを取っていきます。(各種提出物の現状をデータ化して必要に応じて提示している)。

最終的に、学生による総合的自己評価がどのようにできるようになるのでしょうか。言うまでもなく、自己評価・相互評価がベースです。そして、プロセスはポートフォリオ・プロセス評価が大事です。議事録、活動記録、コメント、アクセス数など、そして、成果物やプレゼンテーションによる客観評価と、学生がすべての評価資料から自分自身の総合評価ができるように、データを全部そろえてお互いに議論をしていきます。大体8割5分ぐらい、私の評価と一致します。私の評価と一致しないものについては少し見直します。

最後ですが、教養教育であろうと専門教育であろうと、プロジェクト学習が目指していくものは、やはり学生の潜在力を掘り起こしていくことでしょう。それは、学生の研究力、教育力、社会力、評価力を指します。学生の研究力とは調査・分析・総合、知りたいという分析力、学生の教育力とは相互支援と相互批判、共に学びたいという協調学習、学生の社会力とは社会貢献したい・役に立ちたいという態度、それから、学生の評価力とは信頼、出会い、認められたい・認めたいという評価への志向性です。このようなものを引き出していくことができればいいなと思ひています。

それを引き出すにはどうすればいいのか。やはり個を育むチームの力、プロジェクト学習に尽きるのではないかと思ひます。

私自身の経験も踏まえながら、今日は教養教育と専門教育、その二つに相まがり、こちら側の成果をこちら側へ、こちら側の成果をこちら側へというように、この二つの間の振り子の運動を通して、教えることの面白さを実感させてくれる、私自身の教育に対する原動力だと思ひています。ささやかながら、私が組織的にかつ個人的にも取り組んでいるPBLの試みについて、皆様方にご紹介をさせていただきました。以上で終わらせていただきます。

司会 (山本所長) ありがとうございます。以前の打ち合わせで、前半のプロジェクト科目のところはひょっとしたらハードルが高すぎるではないかと思ひ、後半の部分をちょっとお願いして入れていただきました。われわれに共通する、手が届くような範囲の部分なども結構多かつたのではないかと思ひます。せっかくの機会ですから、先生方のほうで質問等がございましたら挙手をお願いいたします。係の者がマ

イクを持ってまいります。いかがでしょうか。
はい、藤原先生。

藤原先生 現代社会学部の藤原と申します。
非常に興味深く拝聴させていただきました。あ
りがとうございました。

2点程質問がありまして、1点目は教養科目
のものなのですが、手続き上のイニシアティブ、
最初は誰がどのように提案するのかがよく分か
らなかったのです。つまり、外部の団体に公募
しますね。公募するときにすでにテーマは決ま
っているのか、そのテーマを学生はどのように
感知しているのかという、プロジェクト学習と



というのは、本来は学生が発案する、イニシアティブを取るというように私は理解しているのですが、外部
に公募するときにすでにそのテーマは一体どうなっているのかというのが、ちょっとよく分からなかった
ので、ご説明いただきたいのが1点です。

もう1点は、専門科目で、いわゆる基礎演習で事例を頂きましたが、やはりSNSを使った総合的な学び、
つまり情報ネットワークがかなり完備していないとできないわけですが、そのあたりの、いわゆる大学と
の施設・設備的な関係はいかがでしょうかという点です。

山田先生 分かりました。まず、最初のほうのご質問なのですが、学生が提案をして、それで例えば
先生を巻き込んだり、地域のかたを巻き込んだりしてプロジェクトが成立してくるというのも一つのプロジ
ェクトのあり方だと思います。ただ、われわれがやっているのは、むしろテーマそのものは公募して、い
ろいろなかたが考えておられるようなアイデアとか、考えるべき課題とかいうものを出していただいて、
それを学生さんたちに提示します。提示するのですが、うちの学生は敷かれたレールを走るというのはど
ちらかと言うと好きではないので、必ずそれを自分たちの身幅に合って、なおかつ自分たちの特性を生か
すことができるように、そのテーマや課題を再構築するのです。その再構築とそのテーマ提案者のテーマ
性とが幸せな出会いをしますと、ものすごい成果が出ます。そこがずっと続ける場合があります。これは不
幸です。そのときにはいろいろな形でそれを修正していくような努力をします。これが一つです。

それから、他大学の例で言いますと、一番最初は、学生の提案しているようなものばかりでやっていま
した。ところが、それをやっているとうちもだめになってしまいました。それはなぜかと言いますと、最
初は思いつきですから、それをブラッシュアップしていかなければいけないのです。ブラッシュアップし
ていって、認められて、さあこれからだというときに、学生の力は尽きているのです。ブラッシュアップ
の過程でもう精根尽き果てているというケースが、中には出てくるのです。ですから、これはやはりそれ
ぞれの求めるプロジェクトのあり方、あるいは教育のねらい、そのようなものによって異なってくるだろ
うなと思います。これが1点目に対するお答えです。

2点目のネットワークなのですが、これは今、私の場合はたまたま SNS 型でやっています。それは、プ
ロジェクト科目で使っているものを基礎演習に当てはめて試行実験というような形でそれを使ってやって
います。ただし、それを使い始めたのは2年前からです。その前は全く普通の、e-class という全学に提
供されている普通のネットワークでやっていました。

ここで申し上げたいことは、そのような SNS がなければ、私がやったようなことはできないのかとい
うと、そうではないということを申し上げたいのです。条件は非常にシンプルです。すべてが公開されて
いる掲示板であればじゅうぶんです。

そこに、ただもう一つ条件があるのは、多様なファイル形式に対応していることです。そして、誰が書いても、それが全員に見えるという環境であればいいのです。ですから、そのように考えてみますと、どこにでもあるネットワークだというようにお考えいただいてもいいと思います。これがなければできないようなものではありません。

今度は、逆に言いますと、プロジェクト科目の場合などは、チームで活動して情報共有していくときに、このような機能が便利だというようなものが、やはり推奨されるようになってきて、それを学生たちが活用しているということであるに過ぎないと思います。よろしいでしょうか。

司会（山本所長） はい、次に森山先生。

森山先生 大変興味深い話をありがとうございました。特に国文学ということで、非常に興味深く聞かせていただきました。

1点お尋ねさせていただきたいのは、この基礎演習なのですが、これは複数の教員、先生方で持たれていると思うのですが、共通シラバスで、共通の到達目標、つまり評価力を高めるということで行われているのでしょうか。それをお尋ねしたいのですが。

山田先生 はい。最初から完全に共通でやっているわけではありません。私の場合には、それがかなりはっきり明確に出ているだけのことです。ただ、最初に書いたように、何と申すのでしょうか、私たちは、どちらかと言うと割と緩いのです。基礎演習は、全クラスともチームです。2年生でやる研究演習のときは、全部が個人発表です。この発表形式や授業形式というのが、基礎演習と研究演習で違います。内容はそれぞれの素材や進め方になっており、おのずと違います。

もう一つ言いますと、成績表をつけますが、成績表をつけたときに、教員も成績会議を必ずやります。それで、点数もすべて提示して。あるクラスがあまりに成績が良かったりしたら修正します。この点は、卒業論文の点数もずっと同じです。卒業論文のときにも、最高の点数をつけた場合と最低の点数をつけた場合というのは、事情を説明しなければなりません。というように、いわば成績評価というところで、一つの最終アウトプットのところで方向性を確認しあうということです。

ですから、基礎演習に関しては、一応最初に申し上げたような、研究入門になるようなこと、それから自分自身で情報収集も交えて基礎力をつけることができること、というようなことは全員で共通で持っています。それ以上の縛りはありません。

森山先生 すべてのかたが、評価力を高めるとか、お互いに評価しあうとか、検定問題作りをしているとか、それから、先程大変すてきな部屋だと思いましたが、あの教室を使って授業をされているとか、そのようなわけではないということですか。

山田先生 ありません。

森山先生 はい。分かりました。

山田先生 今私が、お答えになっていないようなお答えをしたかもしれないのですが、それは最近の傾向として、すべてを画一的に進めていくということになるのはちょっとまずいというのが、われわれの学科の認識なのです。つまり、目標をはっきりさせましょう。それから、それはチーム学習であるのか、個人学習であるのか、教育の方法をはっきりさせましょう。それから、成績評価のところはお互いにしっかりチェックしあいましょう。問題点のある学生についてはお互いに報告しあいましょう。そのことによ

て、その学生を次のステップにどのように進めてあげればいいのかということを、私たちは学科会議などが終わったときに、毎回かなり率直に議論しています。僕はそれで十分だと思っています。だから、変に画一的に、このようにしなければならないというように言ったら、その教師の個性がどこかに行ってしまうのではないのでしょうか。

でも、そう言いながら、今私が言っていることはすごい縛りなのです。なかなか嫌でしょう？ 全部の成績表を学科の中でずらっと公表して、お互いに修正しあうなどは、嫌でしょう？ やっておられるところもあると思うのですが、われわれは当たり前なのですが、「チーム学習でやってくださいよ」と、言われるのです。「いやいや、個人学習にしたい」、許されません。このような縛りなのです。これが、私たちの運用の縛りです。

司会（山本所長） 他にもう一つ何かあるでしょうか。はい、どうぞ、村瀬先生。

村瀬先生 発表ありがとうございました。プロジェクトのお話と、初年次の二つ聞かせてもらって良かったと思います。両方聞かせてもらったのは良かったと思います。今までFDの講習会をいろいろとお聞きしているのですが、あまり引っかかるということはなかったのですが、今日はたくさん引かかりました。それで、初年次のほうは、ここのフロアの先生方は、多分いっぱい引っかかると思います。

私のほうはプロジェクトのほうを少々お聞きしたいのです。例えば、今回頂いた真ん中のあたりに、「京都のおたべとの連携」というのが一つあります。それからその次にケース3で、「着てみたい着物をプロデュースしよう」というのがあります。女子大のほうは生活科学部がありまして、例えば被服や食物を専門にやるという科目があります。ところが、「おたべとの連携をしよう」とか、「着物のことのプロデュースをしよう」と言っていたときに、食物の専門教育もないし、被服の専門の教育もないのだが、学生はこれをやるわけです。その場合の基礎的な力というのを学生はどこからどのように持ってくるか、そこをお聞きしたいのです。

山田先生 プロジェクトをやっていくときに大変重要なポイントについてご指摘いただいたのですが、まず専門家ではないので、基本的な知識を入れていかなければなりません。おたべの場合には、いくつかの要素があるのですが、マーケットリサーチなどをやるのは、それはそれで教わるのです。同時に、実際に商品化していくときに、その現場に行って作っている現場の人に、どのようにして作られていて、この材料に関してはどのような特性があって、それをこのように組み合わせることはできるが、これはできないというようなことを、実際にそこへ出かけて行って、その工場の中の職人さんに、実際に話を聞いたりしながらいろいろと教わっていくわけです。何回も足を運ぶ中でお互いに学んでいき、教えてもらって、必要な文献があれば教えてもらうという中で、これはできること、これはできないことというようなことをだんだん学んでいきます。だが、できないことだからできないというようにしてしまうとどうしようもないので、逆に、「できるかどうかちょっとトライしてみよう」というように担当者が、やはりそれへ導いていってくれます。だからその意味では、現場で学ぶという要素が非常に強いと思います。

着物の場合なども同じです。着物の会社がありますので、染めの工程から織りの工程から帯地から全部、その現場へ行って、すべての工程をつぶさに見学させてもらって、そこで働いていらっしゃるかたがたに取材をして、どのようになっているのかというのをずっと勉強していきます。つまり、現場で学ぶということが、一番知識の習得・定着率が高いということかと思います。ただ文を読むだけではないということです。

村瀬先生 分かりました。ありがとうございます。ということは、現場のプロデュースといいますが、コンタクトはどなたがされる形になるのですか。

山田先生 コンタクトは、われわれの場合には公募制でやっているのですが、担当者が、すなわち指導者であり、担当者が、すなわちその住人であるといえますか、勤務者であるということになりますので、そのまま、部下であったり知り合いであったりというところから、自然に入っていくと、そのような形になっています。

司会（山本所長） 誰か、あと一つだけどうですか。

藤原先生 今の質問と関連するのですが、結局外部の人材、リソースを使わない、あるいは使えない、あるいはなかなかネットワークができないという状況を考えるに、女子大学などは多分そのようなのが結構あると思うのですが、学生が自ら動いていく、非常に狭義のアクティブ・ラーニングのようなところで、このプロジェクトの学習というのはできるのだろうかという点と、それはやはり学習効果が低い、やはり外部のリソースをしっかりと入れてお互いに学び合っていくほうが学習効果が高いと、どちらだと思われますかという質問です。

山田先生 ちょっと答えにくいところではあるのですが、つまり、おそらく教育目的によってチョイスするものかなと思うのです。今日お話ししたところで皆さんもお気づきだと思うのですが、基礎演習の中で私がやっていることというのは、社会連携型ではないです。これはどちらかと言うと、PBLの中でも、チュートリアル型と言いますか、教室内で完結するわけです。ただしそれは、クラスそのものに、一定度の社会性を付与するという形でやっているのです。ですからいわゆるプロブレム・ベースド・ラーニングというよりはもう少し広がりがある、その中間ぐらいの形で、今回やっているのです。

なぜそのほうが向いているのかと言うと、やはり専門教育でやっていく場合であり、同時に、このような目的でなければならないという条件づけがあるので、その条件づけの中で一つ導入してみたら、このような形になってきたのです。

例えば、教養教育科目の中でPBLをやっていきましようとなったときには、できるだけ多くの多様なジャンルのものに触れてもらうということが、教養教育にとっては大切です。だからその中で、ではその多様性というものにどう取り組んでいって、その魅力を学生に感じてもらうのかということに、そちらのほうは重点を置かれることになりますから、そうすると、そちらのほうはそのようなプロジェクトの推進の方法と仕組みづくりをしていくという形になってくるのだと思うのです。ですから、その意味で言いますと、何をチョイスするのかというのは、やはり教育目的ということと非常に密接に結びついているかと思います。

（事務局より）

※上記FD講習会講演関係資料のご希望がございましたら、教育・研究推進センター事務室までご連絡ください。

2012年度新任教員入社前オリエンテーション FD ガイダンス開催報告◆

2012年度新任教員入社前オリエンテーションが2012年3月28日（水）に京田辺キャンパス知徳館261会議室において開催されました。毎年開催されるこのオリエンテーションでは、当センターも同志社女子大学の研究支援体制、研究論理、FD ガイダンスについて説明を行っています。（本冊子に掲載可とされた教員のみ掲載）

生活科学部 人間生活学科 赤澤 真理

3月28日に新任教員入社前オリエンテーションに参加させていただきました。初めに学長からのご挨拶があり、続いて本学の教育理念・教育研究体制・大学組織について、講義を受けました。まず本学の基本精神である、キリスト教主義・国際主義・リベラルアーツについて学び、創始者である新島襄先生のキリスト教理解と本学におけるキリスト教教育について、お教えいただきました。学生一人一人を大切に、その人格を育てていくこと、自己の考え方を相対化し、周囲の人々と共に生きようとする「良心」という感覚など、近代における新しい思想に基づいて創められた本学の理念を学び、感銘を受けました。次に、入学生の動向や講義・試験等の説明を受け、女子大学や京都という立地を活かした豊かな学びの実践についてうかがいました。教育・研究推進センターからは、豊富な資料をもとに、授業アンケートや講習会などのFDの取組み、研究助成などの十分な支援体制についてお教えいただきました。新任教員として、本学の万全な環境のもとで、研鑽を積んでいきたいと思いを新たにいたしました。

本学 FD 推進事業について◆

学芸学部「ピアノ奏法研究Ⅱ」(中野慶理先生)の授業を参観して

教育・研究推進センター主任 河江 優

今回参観させて頂いた「ピアノ奏法研究Ⅱ」は、ピアノ専攻の2年次生30名の必修授業となっています。この授業では一対一の実技レッスンとは異なる形式により、音楽やピアノの諸問題について考えていくとともに、同じ楽器を学ぶ者同士のつながりを深め、共に力を高めていくことを主眼にしています。今回の授業テーマは「初心者へのピアノ指導」ということで、子供達へ教師はどのように接したらよいかを考えていくものでした。授業は、遅れてくる学生への配慮とのことで午前9時をやや過ぎてから本格的に開始されました。確かに朝一番の授業は、定時を微妙に過ぎてパラパラ入ってくる学生もおり、それがスムーズな授業開始の妨げになることも事実です。そのような対策として私は出席を一人ずつ取りながら雑談を行っていますが、中野先生の授業のように「しばし待つ」ということは学生を来るべき授業に向けて気持ちを集中させる効果もあるように感じました。まずピアノの前に中野先生が座り、子供の姿に扮して様々な事例を演じられ、教師役の学生2名にその対処法を答えさせるということから始まりました。ここでの先生の演技が余りにインパクトが強く、クラス中笑いの渦に包まれたため、そこに関心が集中してしまったかもしれません。この学生2名はその場で指名したのではなく、あらかじめ声をかけておいた所属学生だそうですが、予想に反して答えを引き出すことは難しかったようでした。しかしこれは、朝一番の授業を笑いで目覚めさせる意図もあったと私は理解しました。次に、初心者用の教材を使っての模擬レッスン(生徒役の中野先生を教師役の学生がレッスンする)を行いました。ここで教師役の学生を思い切って他の学生に変えることも授業の進行のためには有効だったかもしれません。同じ2名の学生がここでも教師役でしたが、お互い照れや気遣いもあって何となく意見を云いにくい様子で、この場合教師役は1名にしてもよかったかもしれません。また、この頃になると他の学生がやや観客化してきたため、教師役の学生をもう少し回していくことも授業のやり方としては可能かと思いました。朝一番の授業ゆえ遅刻する学生もおり、彼女達の入室の都度出席簿へチェックされるのですが、聞き手の側からはお話の流れがその度少々途切れる気も致しました。このように朝一番の授業は難しさを伴うものですが、クラスの雰囲気も落ち着いてきた後半ではそう云ったこともなく、中野先生の音楽に対する思いが打ち出された授業が展開されました。初心者教育から話題は広がり、明日の世代へ音楽の素晴らしさを如何に伝えていくか、それには何を私達がしなければならないのか、熱く語る先生のご様子には感銘を受けました。加えて断片的に弾かれるピアノ演奏がまた素晴らしく、学生達は固唾を呑んで聴き入っていました。自分の授業を省みる点でも、今回このような機会を与えて下さった中野先生には心から感謝申し上げます。



そのような対策として私は出席を一人ずつ取りながら雑談を行っていますが、中野先生の授業のように「しばし待つ」ということは学生を来るべき授業に向けて気持ちを集中させる効果もあるように感じました。まずピアノの前に中野先生が座り、子供の姿に扮して様々な事例を演じられ、教師役の学生2名にその対処法を答えさせるということから始まりました。ここでの先生の演技が余りにインパクトが強く、クラス中笑いの渦に包まれたため、そこに関心が集中してしまったかもしれません。この学生2名はその場で指名したのではなく、あらかじめ声をかけておいた所属学生だそうですが、予想に反して答えを引き出すことは難しかったようでした。しかしこれは、朝一番の授業を笑いで目覚めさせる意図もあったと私は理解しました。次に、初心者用の教材を使っての模擬レッスン(生徒役の中野先生を教師役の学生がレッスンする)を行いました。ここで教師役の学生を思い切って他の学生に変えることも授業の進行のためには有効だったかもしれません。同じ2名の学生がここでも教師役でしたが、お互い照れや気遣いもあって何となく意見を云いにくい様子で、この場合教師役は1名にしてもよかったかもしれません。また、この頃になると他の学生がやや観客化してきたため、教師役の学生をもう少し回していくことも授業のやり方としては可能かと思いました。朝一番の授業ゆえ遅刻する学生もおり、彼女達の入室の都度出席簿へチェックされるのですが、聞き手の側からはお話の流れがその度少々途切れる気も致しました。このように朝一番の授業は難しさを伴うものですが、クラスの雰囲気も落ち着いてきた後半ではそう云ったこともなく、中野先生の音楽に対する思いが打ち出された授業が展開されました。初心者教育から話題は広がり、明日の世代へ音楽の素晴らしさを如何に伝えていくか、それには何を私達がしなければならないのか、熱く語る先生のご様子には感銘を受けました。加えて断片的に弾かれるピアノ演奏がまた素晴らしく、学生達は固唾を呑んで聴き入っていました。自分の授業を省みる点でも、今回このような機会を与えて下さった中野先生には心から感謝申し上げます。

現代社会学部「国語科指導法」(松崎正治先生)の授業を参観して

教育・研究推進センター主任 朱 捷

現代こども学科松崎正治先生の「国語科指導法」を見学しました。とてもリズムカルな授業でした。

小学校の先生を目指す受講生に国語科の教え方を身につけさせるこの授業は、スピーチ力を鍛えるために、毎回冒頭に受講生の1人に3分間のスピーチをさせています。ただスピーチさせているだけでなく、聞き手全員に「聞き取りカード」をも書かせています。「聞き取りカード」をみますと、発表についてのチェックポイントが14個以上も記されています。話し手のみならず、聞き手も真剣に取り組まなければなりません。書いた「聞き取りカード」は授業後に発表者に渡され、級友の温かいコメントや改善についてのアドバイスなどが発表者にとって励みになるばかりでなく、クラスメートがこのカードを通して心が通い合い、みんながこの授業を楽しみにしてやってくるという効果も期待されます。



この日もチャイムとともに授業は、前回のスピーチに対する発表者の反省から始まりました。みんなの「聞き取りカード」をもとにする反省はとても具体的で、それ自体が聞き応えのあるショートスピーチでした。

つぎに、「ことばの学び通信」の発表。小学校で必ず発行する学級通信や教科通信の練習を積ませるために、4人1組で編集する手書きの通信は毎週発行されます。A3サイズ1枚の通信は、詩の紹介、ことばの話題、読書案内、エッセイ「私の見聞録」という4つのコーナーからなっており、内容満載もさることながら、さまざまな工夫がみられ、編集者の心血が伝わってきます。

そしていよいよ本題「模擬授業」が始まります。担当者は5人。5人が1組になって、小学校1時間の授業で教えるひとつのテキストを5つのパーツにわけて5人で分担し、それぞれ授業を実演します。

順番に登場する5人の発表者は誰も生き生きとした表情をしています。配られた資料をみると、板書の文字やレイアウトも含めて、模擬授業には「学習指導案」と称する綿密な授業計画書があらかじめ用意されていました。それが発表者の自信の表情に表れているようにみえました。

模擬授業のあいだに、他の受講生は児童役を演じて先生役の発表者に協力しながら、「授業評価カード」に、気づいたことやコメント、感想をせつせと書き込みます。発表者のみならず、受講生全員に高い参加意識と集中度が求められます。そして割り当てられた時間内で1人の実演がおわるたびに、それに対するみんなの批評が始まります。誰から指名されるわけでもなく、教室のあちこちから手を上げて積極的に発言を求める光景は、学生が真に主体となっていることやクラスの高い一体感をひしひしと感じさせてくれます。

スピーチをはじめ、「ことばの学び通信」の発行や模擬授業の計画立案、さらには模擬授業のあと担当者が授業記録や振り返りの記録もつけないといけないなど、この授業に参加するのに、受講者はさまざまな役割を与えられ、予習復習にかかる時間は半端ではありません。クラスに対する高い帰属意識や授業に対する主人公意識がなければ、とても持続されないでしょう。40人ほどの受講生全員に高いモチベーショ

ンを植え付けた教員の力量に感心するとともに、ここで鍛えられた受講生はやがてこの授業のDNAを自分の担任クラスに受け継いで、いい国語の先生になっていくだろうと想像しました。

授業中、教員はビデオを回して、学生の発表を丁寧に記録していました。そして、発表者が困ったときには適切かつコンパクトにコメントを与えています。全員にまんべんなく発言の機会を与えるよう配慮もしています。そのうえ、出席確認の点呼を学生がコメントを書くあいだにするなど、時間の配分に寸分の無駄もありませんでした。

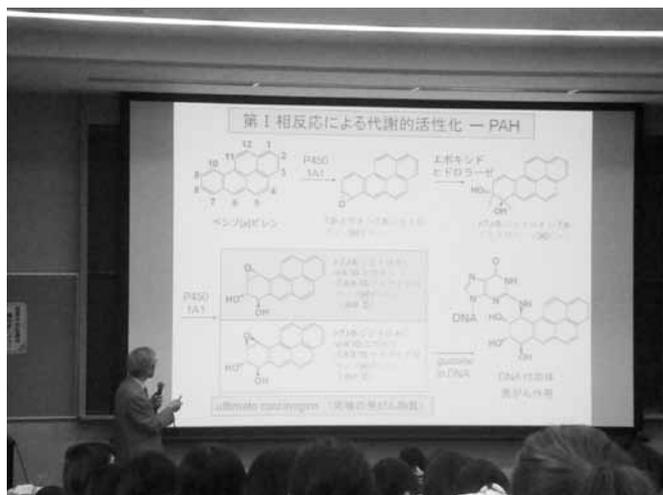
チャイムとともに授業ははかったようにぴたりと終わりました。中身が濃いのみならず、受講生の高い集中度が強く印象に残る、実にメリハリのきく、楽しい90分でした。

薬学部「衛生化学」(木津良一先生)の授業を参観して

教育・研究推進センター主任 川崎 清史

薬学部では多くの科目が必修科目になっています。その理由は学生の興味を伸ばすよりも薬学部コアカリキュラムや薬剤師国家試験に対応する内容をこなしていくことが優先されるので画一的な教育が必要だからである、と私は理解しています。したがって、授業を受ける学生は必ずしも授業内容に興味があるわけではないので、学生にいかに関心を持たせて授業を行うかが課題の一つとなっていると感じています。衛生化学の授業目標はシラバスによると環境因子(化学物質や電磁波など)の有害作用、特に(1)化学物質の代謝/代謝的活性化、(2)化学物質による発がん、(3)化学物質の毒性、(4)化学物質による中毒と処置、(5)電離放射線および非電離放射線の生体への影響、を学習することです。そしてこれらの内容は薬学部コアカリキュラムに対応しており、薬学部の典型的な講義科目の一つとなっています。この講義の授業形式と学生の受講態度がどのようなものであるか、そして薬学部の典型的講義科目の授業スタイルとして何か参考にできるものはないか、という観点で授業参観に参加しました。

授業はパワーポイントを活用するスタイルで行われていました。学生には事前にパワーポイントを印刷した資料が配られているようでした。オープンクラス当日にも資料が配付されていましたが、その資料は翌週以降に使用されるものであったので、学生に事前学習のために事前配布されていると思いました。先生が作成されたパワーポイント及びその資料は大変美しく、化学物質の構造式等がはっきりと示されていて、板書ではできないことがパワーポイントの活用のできる様になっていると感じました。さらに、説明は非常に懇切丁寧でありました。パワーポイントの授業の場合、進行スピードが速くなりがちであるために学生に理解が追いつかない傾向があると感じていますが、このように丁寧な説明をすれば大丈夫であろうと感じられました。また、新しい話題に入る際には上述のコアカリとの対応を学生に明示して、その内容の重要性が示されていました。コアカリと授業内容を対比して説明することは学生がCBTや国家試験対策をする上で重要な情報になるので、とても大切なことであると思いました。また、授業では比較的静



かに学生が聴講しており、静粛な授業環境が保たれていました。木津先生の講義力が優れているので学生に興味を持たせることができているのだと感じました。1時間30分の授業は長丁場なので、学生が授業に興味があっても学生の集中力が途切れて学生がざわつくような雰囲気になることがありますが、この講義では最後まで学生が熱心に受講していました。静粛にするための特別な工夫は見当たらなかったのですが、授業内容の面白さ、説明のわかりやすさ、など良い授業であるために必要なことが備わっていることがその理由だろうと感じました。

表象文化学部「Junior Seminar II」(Juliet W. CARPENTER 先生)の 授業を参観して

教育・研究センター主任 若本 夏美

授業に重要な要素はいくつもあるだろうが、カーペンター先生の授業を見せて頂き改めて教師の「声」が極めて大切であることを実感する。声によって伝えるべきことを言葉に表して伝える。その声が聞き取りやすく、心地よいものであるほど内容は学生に理解されやすくなるのは当然である。メラビアンの法則によると言語情報 (Verbal) の比重が7%であるのに対し、視覚情報 (Visual) は55%、音声情報 (Vocal) は38%を占める (Mehrabian, 1972)。これはそれらが相反する場合に優先する情報は何かという条件付きであるが、声の質は予想以上に重要であることは間違いない。今回ビデオでの参



加となったが臨場感の欠けるビデオの中でもカーペンター先生の声は魅力的で美しく、視線が画面に釘付けになった。それは教室にいた学生の集中度からもはっきりと見て取れた。本来このオープンクラスの趣旨は Faculty Development (FD) の一環として学び取れるものをその先生から「まねる」ところにあるが、「声の質」はまねようと思ってもできるわけではない。ただ、このことを言わずにはおられなかった、というのが正直なところだ。教師の声は授業にとって重要だ。

さて、授業の内容に移ろう。時折先生の流暢な日本語が交錯するものの授業の95%以上は英語オンリーで進められる。学生は時に矢継ぎ早に先生から繰り出される質問に唸り、英語で答え、時にグループワークの中でゼミメンバーと議論を繰り広げる。車のギアチェンジのように授業の中でそのペースが何度もシフトする。学生の集中を一瞬たりとも先生は切らさない。今回の授業は映画『東京物語』(小津安二郎監督)と『生きる』(黒澤明監督)を題材に「映画の日本語セリフを英語にどう翻訳するか」がテーマ。学生が予め提出しておいたアサインメントに先生がコメントを加えながらスクリプトの翻訳の検討が進む。思っていた以上に学生の翻訳は上手い。ただ、難しいのは案外簡単な表現だ。たとえば、「もう若くありませんわ」の訳には、“No, I’m not.” これは駄目。相手が義理の母であることを考慮しなければならないのだ。「強すぎる、相手に対する contradiction (反駁) になってしまっている。“I am not that young any more” として相手に対する尊敬の念をにじませなくてはならない」と先生は語る。また「大丈夫よ」の英語訳が “No problem.” これはあまりに現代的で若者言葉であって適切ではない。『生きる』では「おし

るこ」をどう訳すか？これは、英語に対応するものが無いので“ice cream”としようという先生の提案。場の状況、言語が使われる国や文化状況を考えて翻訳しないと相手には通じない。いくらYahooの機械翻訳を利用して当分、人間による翻訳には敵わないな、と感じた。また翻訳に関するテキストはいくつも出版されているが、このような機微にふれる訳の仕方はカーペンター先生のような超一流の翻訳家から直接教えてもらわないと実際にはわからない。

今回の授業を通して、授業も翻訳も詰まるところコミュニケーションなのだ、と思った。翻訳はそれを目にするその国の人、授業は受講する学生の事をよく考えながら伝えようとしないと届かない。授業に多様なアクティビティー（個人・グループワーク、ロールプレイ、テキストの朗読）を織り交ぜながら学生に意図をしっかりと伝える声を持った授業。全てをまねることはかなわないまでも、多くのヒントを与えて頂いた素晴らしい機会となった。

参考文献： Mehrabian, A. (2007). *Nonverbal communication*. New Brunswick (U.S.A.): AldineTransaction.

生活科学部「栄養教育論」（片井加奈子先生）の授業を参観して

教育・研究推進センター主任 伊藤 節子

生活科学部のオープンクラスは食物栄養科学科管理栄養士専攻の片井加奈子先生にお願いして12月3日（月）Ⅱ講時の栄養教育論Ⅰを参観させていただきました。

ケーススタディとして栄養学的知識が乏しい上に家庭環境、職場などの社会的環境にも問題のある妊婦さんの栄養教育をテーマとして、問題行動の要因分析と行動目標の要因分析をとりあげた授業であった。授業中に学生の作業時間が確保されているため、確実に全員が作業に取り組むことができるよう工夫がされていた。多くの授業科目では、時間的制約からこのような作業は宿題として持ち帰らせた上で、授業時間



は学生に質問しながら教員の説明に使うことが多いのが現状ではないかと考えるが、このような作業を組み込むことが学生の集中力とやる気につながり、授業の効果を高めることを実感することができた。栄養教育という科目の特性を活かし、しかも学生の集中力を保たせる工夫がされた素晴らしい授業であった。大教室であったため用意されていた模造紙に書かれた資料が見にくいというハプニングもあったが、学生の作業中にパワーポイントを作成して示されるなど臨機応変な対応がなされていた。

大変参考になる素晴らしい授業を参観させていただいた片井加奈子先生に厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

第9回 FD-YG 会開催報告

教育・研究推進センター主任 朱 捷

開催日程：2012年7月18日（水）18：00～19：20

開催場所：京田辺キャンパス 知徳館421会議室

第9回 FD-YG 会は「授業アンケートのあり方について」をテーマとした。参加教員は音楽学科、情報メディア学科、社会システム学科、医療薬学科、英語英文学科、日本語日本文学科、人間生活学科、食物栄養科学科の12名であった。

はじめに、事務局から同志社女子大学における授業アンケートのこれまでの歩みについて報告があった。これをうけて、出席者一同はさまざまな角度から積極的な意見交換をおこなった。予定していた1時間があったという間に経ったくらい充実した「ワイワイガヤガヤ」であった。いろいろな提言や意見が出されたが、議論がとくに集中したのは以下の3点であった。

1. 授業アンケートの質問項目数・内容について

同志社女子大学は1996年度春学期から授業アンケートを始めたが、当初の質問項目は11、現行の15項目になったのは、同年の秋学期からであった。しかし、教員のあいだでは15という項目数及びその内容についてとくに改善意見が多く聞かれる。

少人数のクラスに比べ、大人数の大教室ではアンケートの効果が著しく落ちる。15項目は微細に分かれすぎてかえって焦点が見えにくく、答えにくいのも理由の一つとして考えられる。学生はアンケート疲れて、適当に一律1、あるいは5とマークする人も見受けられる。質問項目を精査して10項目くらいに改めたらどうか。たとえば質問15は授業妨害の対処についてだが、授業形態によってそういう問題が起こりえない場合も多く、学生が回答に戸惑ってしまう。

一方、現行の質問項目に、考える力がついたかどうかについてのものはない。質問項目を再編する際に追加したらどうか、との意見も出された。

2. 全科目実施について

現行の授業アンケートは、専任教員は2科目を任意に選んで実施してよいとなっている。2012年度から嘱託講師が担当科目すべてについて授業アンケート実施を義務づけられたのにあわせて、専任教員も、大学院や少人数クラスをふくめ、全科目実施すべしとの意見が多かった。

現在では10人以下のクラスは実施の対象に含まれておらず、教員が希望すれば実施してもよいことになっている。受講生1人のクラスも含め、実施方法の工夫はむろん必要だが、全科目実施に改めたらどうか。

3. 授業評価報告について

授業アンケートそのものが授業の改善に役立っていると多くの教員は評価しているが、授業アンケートの結果をうけてそのつど授業評価報告を提出するのは、はたしてどんな意義があるのかと疑問視する声が多い。

それより、過去数年のデータを比較のために一緒に渡してもらった方が、改善に取り組んでいる項目の変化などを確かめるのに役立つのではないかと、との意見もあった。

以上のほか、出席数が少ない学生ほど授業アンケートにおける評価が低いという傾向があり、出席数の少ない学生の評価を集計から外したらどうか。極端に高い、あるいは低い評価を除外して集計したらどうか。アンケート用紙の配付と回収は職員によっておこなったらどうか、などなどの提言もあったことを附記しておく。

FD 図書紹介

『大学教育のネットワークを創る』

京都大学高等教育研究開発推進センター（編）2011年

教育・研究推進センター主任 朱 捷

2011年に出版された本書は、教員がみずからFDを研鑽しようとして相互研修型のFDネットワークを創った報告書である。

教員が一方的に教壇から教え込むなどの教育方法を改善しようとするのがFDの出発点というなら、従来のFDは、上から制度化されたものを教員が受身的に受け入れなければならないものであった。授業にたとえていうなら、FDそのものがまさに一方的に教え込む型のものであったといえる。これに対し、この報告書が伝えているのは、教員が主体的に取り組もうとする参加型のFDである。

教え込む型の伝達学習か主体的に参加する相互学習か、トップダウンによる制度化かボトムアップによる自己組織化か、という2本の軸をもとに、FDは4つの類型に分けられるが、伝達学習・制度化型が従来のFDの最右翼とすれば、FDの最先端を行くのは、ここに報告されている相互学習・自己組織化型である。

確かにこの本に指摘されているように、トップダウンのFDはあまり実質がないのにもかかわらず、単なる外部説明のための「エビデンス」として便利に利用されている一面がある。こうした状況を問題と感じ、それを打開しようとするさまざまなアプローチが試みられているが、この本に報告されているのは、大学教員相互の協働や交流を促し、その日常的な教育改善を支援することによってFDを具体化しようとするアプローチとそれによる成果である。

そのひとつにSOLT (Scholarship of Teaching and Learning) と呼ばれる理念と実践が紹介されている。SOLTとは、教授と学習についての学術的探究を通してそれを改善しようとする営みやその成果として得られる知のことであり、学者 (scholar)らしい活動を、研究だけでなく教育にまで広げ、教育にも研究と同等の価値を与えようとする意図から生まれたものとして説明されている。いいかえれば、研究だけでなく教育も学者の知的探究の立派な対象であることを自覚し、それを自らの知的探究の一部に位置づけ、自ら進んで実践することであろう。

SOLTを支援する実践として、インディアナ大学の小規模な教員ネットワークをはじめ、さまざまなテクノロジーが紹介されている。

京都大学高等教育研究開発推進センターで実践した、オンラインFD支援システムMOST (Mutual Online System for Teaching and Learning) の紹介もとても興味深い。

アメリカから始まったFDは、日本でもトップダウン型から確実に深化している。FDの最先端に関心のある方には是非薦めたい1冊である。

TA 制度導入報告

教育・研究推進センター主任 朱 捷

2012年度からTA制度が導入されました。TAにどんなことをさせれば、授業のためにもプラスになり、TAにも教育にたずさわる勉強になるのかを、TA制度利用に当たって、まず考えました。授業のデータ整理も大切ですが、学部生にレポートや卒論作成についてアドバイスをすること、および学部生が作成したレポートを下読みすることが、TAにとって、授業の内容に関与し、教育経験を積むことになるだろうと考え、後者をTAの主な仕事内容にしました。その趣旨もTAに説明し、理解を得たうえで、仕事に取り組んでもらいました。はじめてのTA制度利用ですが、1学期を終えて、授業の充実や効率向上に貢献してくれたのみならず、TAたち自身にも収穫があったようです。以下は彼女たちの感想です。

Teaching Assistant を終えて

国際社会システム研究科国際社会システム専攻
作田 暁子 小林 七生

半年のTA活動の中で最も収穫を得ることができたのは学部生が書いたレポートの下読みでした。最初はレポートを読み、評価することに戸惑いましたが多くのレポートを読みこなすうちに良いレポートとそうでないものの区別がつくようになりました。

特に目についた点は参考文献や引用などの形式的なミスやオリジナリティが欠けたもの、また感想文に近いものです。ほとんどのレポートはあれこれ詰め込みすぎて何が言いたいのか分からなかったり、取っつけたような文章が見られました。中には実体験を織り込んだレポートもあり感想文としてはおもしろく読めましたが、レポートとしては客観性が欠けるように感じます。そのような中でも話の筋がぶれず、オリジナリティ溢れているレポートもあり参考になりました。

普段、研究で読む論文とは違い、自分たちと同じ学生のレポートなので論文を書いていく上で陥りやすいミスに気付くことができました。このようなことは自分だけでは見過ごしやすいので私たちにとっては小さくも大きな発見でした。修士論文では今回のレポートを読んで気がついたことに注意しながら書いていきたいと思います。

TA と LMS

教育・研究推進センター主任 若本 夏美

クラスサイズに比例して一方通行の度合いは高まり、逆に反比例して受講生の満足度は下がるのが通例である。「外国語教育論」の授業は春・秋学期とも150名近い受講生を迎えるため工夫なしにはこのトラップに陥ってしまう。この救世主となるのはLMS (Learning Management System) であるはずであるが、本学で提供されていたCyber-Vineは休止したままである。そこで個人契約で利用しているMoodle (Modular Object-Oriented Dynamic Learning Environment) を昨年からのこのコースでも活用しはじめたが、課題の管理に多大の時間を要することが分かった。NHK番組として話題になった「白熱教室」(ハーバード大学Michael Sandel教授)も事前にLMSに投稿された課題をTAが整理してからこそ成立していたのだ。この授業はまだサンデル教授の足下にも及ばないが、大クラスの弱点をLMSが補足できるようTAが献身的な働きをしてくれた。感謝の言葉もない。スマートフォン隆盛のこの時代、LMSとTAは授業の救世主となっていこう。



教えることは学ぶこと

文学研究科英語英文学専攻 滝澤 伊都子

外国語教育論ⅡのTAとして、いわばテニスの壁打ちの「壁」の役割を果たしました。その際心掛けたのは、どんなボールが来ても誠実に返すということです。毎週授業前後に送られてくる延べ約160人分の課題を読んで、個々に適切な返答をするのは骨が折れる仕事でしたが、回を重ねるごとにこちらの返答に対して返信をいただくこともあり、パソコンを開けるのが楽しみになりました。また教授者でもなく学生でもない立場で継続して授業に関わるという初めての体験は、異なった角度から教室を見ているような不思議な感覚を私に与えました。学生の方々のさまざまな意見や感想は私を刺激し、顔は見えないけれど文章に個性や人柄は表れるという気づきにつながりました。半年間のTAを終えた今、研究者を目指す者がこのような客観的視点を増やす機会を得たことは、論文を20本読むことに匹敵するのではないかと、と思っています。そして何よりも、自分の研究テーマ「ライティングにおけるピアフィードバック」を自ら実践したことになりました。教えることは学ぶこと、という金言を改めてかみしめております。

2012年度メルマガ「FD ニュース」の発行報告◆

2012		
月	ニュース	トピックス
4月	「FDレポート第5号」の発行について	FD 関係資料の紹介
	2012年度新任教員入社前オリエンテーションの実施 (FD ガイダンスを含む) について	FD 関係セミナー、講演会の案内
	2012年度 FD-YG 会のテーマ募集について	
5月	2012年度春学期授業アンケート実施科目調査書の配布について	FD 関係資料の紹介
	2011年度在学生アンケートの実施結果について	FD 関係セミナー、講演会の案内
6月	第9回 FD-YG 会の開催について	FD 関係資料の紹介
	2012年度新入生アンケートの実施結果について	FD 関係セミナー、講演会の案内
7月	2012年度春学期授業アンケートについて	FD 関係資料の紹介
	第9回 FD-YG 会の開催報告について	FD 関係セミナー、講演会の案内
	2012年度 FD 講習会の開催について	
8月	休刊	休刊
9月	休刊	休刊
10月	研究業績及び教育活動に関する報告書の提出について (お願い)	FD 関係資料の紹介
		FD 関係セミナー、講演会の案内
11月	2012年度オープンクラスについて	FD 関係資料の紹介
	2012年度秋学期授業アンケート実施科目調査について	FD 関係セミナー、講演会の案内
	2012年度在学生アンケートの実施について	
12月	2012年度秋学期授業アンケートについて	FD 関係資料の紹介
		FD 関係セミナー、講演会の案内
1月	研究者データベースの確認及び冊子の校正について (お願い)	FD 関係資料の紹介
	2012年度秋学期授業アンケートについて	FD 関係セミナー、講演会の案内
3月	2012年度秋学期授業評価報告について	FD 関係資料の紹介
		FD 関係セミナー、講演会の案内

FD 活動報告 (2012年度) ◆

分 類

- 1 本学 FD 事業関係
- 2 学外における FD 活動
- 3 FD 関係会議

2011年 3月 現在

1 本学 FD 事業関係

実施時期	活動内容等	実施組織等	概 要
3月	2012年度 新任教員対象 FD ガイダンス	総務部主催	新任教員に対し、本学 FD 事業のガイダンス実施(懇談含む)
4月	2012年度 新入生アンケートの実施	教育・研究推進センター	新入生全員に対するアンケートを実施
	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第36号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第36号の配信
5月	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第37号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第37号の配信
6月	授業アンケート実施科目の 確認	全学部学科 教育・研究推進センター	全科目担当者に対する問合せ及び学部学科での確認作業
	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第38号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第38号の配信
7月	第9回 FD-YG 会の開催	教育・研究推進センター	話 題 「授業アンケートのあり方について」 参加者 14名(職員含む)
	2012年度春学期授業アン ケートの実施	教育・研究推進センター	実施期間 7月17日(火)～7月30日(月) 予備週含む
	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第39号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第39号の配信および囑託講師への 配布
8 9月	2012年度春学期授業 アンケート実施結果の フィードバック	教育・研究推進センター	授業アンケート実施結果の配布と授業評価コメントの作成 依頼
	2012年度春学期授業 アンケート実施結果の公開	教育・研究推進センター	図書館にて授業アンケート実施結果(全科目)を公開
	2012年度 FD 講習会・情報交換会の 開催	教育・研究推進センター主 催	講演 『PBL(プロジェクト学習)は学生を変える!』 講師 山田和人氏 同志社大学 PBL 推進支援センター長 文学部教授
10月	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第40号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第40号の配信および囑託講師への 配布
11月	2012年度在学生 アンケートの実施	全学部学科 教育・研究推進センター	在学生全員に対するアンケート調査を実施
	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第41号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第41号の配信および囑託講師への 配布
12月	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第42号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第42号の配信および囑託講師への 配布
	オープンクラスの実施	授業公開教員 授業参観教員 教育・研究推進センター	『オープンクラスの実施』(京田辺・今出川両キャンパスにて)

実施時期	活動内容等	実施組織等	概要
1月	2012年度秋学期授業アンケートの実施	全学部学科 教育・研究推進センター	実施期間 1月7日(月)～1月25日(金) 予備週含む
	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第43号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第43号の配信および嘱託講師への配布
	オープンクラス フィードバック	授業公開教員 教育・研究推進センター	授業を公開された教員に、授業参観参加者のコメントをフィードバック
3月	2012年度秋学期授業アンケート実施結果のフィードバック	全学部学科 教育・研究推進センター	授業アンケート実施結果の配布と授業評価コメントの作成依頼
	2012年度秋学期授業アンケート実施結果の公開	教育・研究推進センター	図書館にて授業アンケート実施結果(全科目)を公開
	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第44号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第44号の配信および嘱託講師への配布
	FD レポート第6号の発行	教育・研究推進センター	全専任教員および各部署に配布

2 学外におけるFD活動

実施時期	活動内容等	参加者等	概要
7月	大学教育改革地域フォーラム 2012 in 同志社大学 への参加	職員	同志社大学今出川キャンパス 明德館21番教室にて開催
11月	同志社大学 PBL 推進支援センター PBL 教育フォーラム 2012への参加	職員	同志社大学新町キャンパス 臨光館301番教室にて開催
	大学・高校実践ソリューション セミナーへの参加	教員・職員	株式会社内田洋行 大阪支店にて開催
2月	2012年度 第18回FDフォーラムへの参加	教員・職員	立命館大学衣笠キャンパスにて開催

3 FD関係検討会議等

実施時期	活動内容等	実施組織等	概要
4月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2012年度春学期授業アンケートについて
			2011年度在学生アンケートの実施結果について
5月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2011年度在学生アンケートの実施結果について
6月	FD 推進事業内容について	センター主任会	第9回FD-YG会の開催について
	FD 推進事業内容について	センター主任会	2012年度春学期授業アンケートについて
7月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2012年度FD講習会について
			2012年度新入生アンケートについて
9月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2012年度FD講習会について
			FDレポート第6号について
			2012年度秋学期授業アンケートについて
10月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2012年度授業参観について
			第9回FD-YG会の開催について
			2012年度春学期授業アンケート実施結果について

実施時期	活動内容等	実施組織等	概 要
11月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2012年度 FD 講習会報告について
			2012年度オープンクラスについて
			2012年度秋学期授業アンケートについて
			2012年度在学生アンケートについて
1月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2013年度 FD 講習会 講師・テーマについて
			2013年度授業アンケートについて
			第10回 FD-YG 会について
			2013年度 FD 事業の概要について
2月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2013年度 FD 事業日程について
			2013年度 FD 講演会 講演講師・テーマ等について
3月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2013年度授業アンケートについて
			2013年度授業アンケートについて

2013年度 FD 事業の概要・日程◆

FD 事業概要

- | |
|---|
| I 教育活動の公表 |
| 1. 本学教員の教育活動について、本学 HP 上の「研究者データベース」で公開する。
2. 本学教員の教育活動について、「教員研究・教育活動等報告書」として冊子で公表する。 |
| II 授業アンケート |
| 3. 「学生による授業評価」 授業アンケートを春秋年 2 回実施する。
4. 「科目区分代表者及び科目担当者へのフィードバック」 授業アンケート実施結果、及び同一科目区分の学生評価平均値及び大学全体の学生評価平均値データをフィードバックする。(春秋年 2 回)
5. 「授業の改善状況把握」 教員個々の授業アンケート実施結果を蓄積管理する。(紙、電子データ) |
| III 授業評価報告 |
| 6. 学生による授業アンケートの結果に対して科目担当者及び科目区分代表者がコメントを記載し、「授業評価報告」として図書館で公開する。(春秋年 2 回) |
| IV オープンクラス |
| 7. 授業の改善を目的として「教員による授業参観」を実施する。 |
| V FD 講習会等の開催・案内 |
| 8. 本学主催 FD 関係講習会等を開催する。
9. 学外で開催される FD 講習会等を学部学科、関係教員に案内し、FD に対する意識向上に努める。 |
| VI 新任教員 FD ガイダンス |
| 10. 本学 FD 事業に関わるガイダンスを、総務部が所管する入社前オリエンテーションの中で行う。 |
| VII 新入生・在学生アンケート |
| 11. 学生生活全般にわたる満足度、学業等における成長度、教育改善 (FD) 効果、本学への帰属意識等の実態について経年で把握できるようにする。 |
| VIII FD の啓発・広報関係事業 |
| 12. FD 啓発誌「FD レポート」を発行する。(年 1 回)
13. メルマガ「FD ニュース」を配信する。(月 1 回配信)
14. 当センターの FD 事業内容及び FD 活動報告を本学ホームページ上で情報を公開する。 |
| IX 教育開発・研究会等に関わる支援 |
| 15. 教育開発・各種研究会への支援
(FD-YG 会、GPA 検討会、e-learning 研究会、授業アンケート研究会) |
| X 大学院 FD 推進事業 |
| 16. 大学院生アンケートを実施する。
その他の FD 活動 (学部教育における FD 活動で対応) |
| XI その他 FD 関係の支援 |
| 17. FD 関係図書・資料等を収集し 教職員への貸し出し・利用に提供する。
18. FD 関係講習会等の参加費・出張費等を補助する。
19. クリッカーを教員に貸し出しする。
20. その他、本学 FD に関すること。 |

2013年度 FD 事業日程 (予定)

春学期

- 3月 ・ 新任教員入社前オリエンテーション FD ガイダンスの実施
- 4月 ・ 新入生アンケートの実施
- 7月 ・ 春学期授業アンケートの実施
- 8月 ・ 授業アンケート実施結果送付とコメント依頼
- 9月 ・ FD 講習会の開催

秋学期

- 11月 ・ オープンクラスの実施
・ 在学生アンケートの実施
・ 大学院生アンケートの実施
- 1月 ・ 秋学期授業アンケートの実施
- 2月 ・ 授業アンケート実施結果送付とコメント依頼
- 3月 ・ 大学コンソーシアム京都主催「FD フォーラム」への参加
(各学科2名以上の参加を依頼)
・ 「教員研究・教育活動等報告書」の発行
・ 「FD レポート」の発行

年間を通して

- ◎ クリッカー貸し出し
- ◎ 「FD-YG 会」および教育開発に関わるセミナー・研究会を支援
- ◎ 学外で開催される FD 関係講習会等を案内、参加費・出張費等の補助
- ◎ FD 関係資料・図書等を収集、貸し出し
- ◎ メールマガジン「同女 FD ニュース」を配信 (月1回配信)

編集後記

9月のFD講習会における山田和人先生の講演「PBLは学生を変える！」は、参加者に大きな反響を呼んだ。将来的に社会で活躍するために必要な人間的基礎能力を「教養」と捉えるならば、PBL教育はこれからの教養教育のモデルとなるであろう。リベラルアーツを掲げる本学に、同志社大学で行われているようなPBL教育を本格的に導入するならば、女子だけの手による（即ち男子に頼らないという意味においても）興味深いプロジェクトを学生は遂行してくれるのではないかと想像しながら拝聴した。またPBL教育に限定せずとも、この講演からは通常の授業を行う上でのアイデアを沢山頂いた。山田先生にはこの場をお借りして感謝申し上げたい。

本年度は、センター所長として新しく山本寿先生が就任され、センター主任も数名が交代となった。山本先生は、前センター所長の川崎祐子先生が示された道筋を継承し、更にそれを発展させるべく様々な検討課題に取り組まれた。本年度に見直しを図り、次年度春学期より実施予定の「学生による授業アンケート」はその一つである。山本所長の下、各主任やセンター事務局の間での意見交換も活発になされた。その中で、これまで年2回実施されてきた「FD-YG会」については、本年度第2回目の開催を見送ることとなった。以前から指摘されてきたことであるが、「YG会」にせよ、「オープンクラス（授業参観）」にせよ、ご参加くださる先生の数が少ないのが現状である。様々な要因が考えられるが、センターでは次年度へ向けて新しい企画を思案しているところである。

最後にお忙しいなか本誌に寄稿して頂いた先生方、編集作業を担って頂いた教育・研究推進センターの職員の方々に厚くお礼を申し上げたい。

教育・研究推進センター主任 河江 優

FDレポート 第6号

2013年 3月 発行
同志社女子大学 教育・研究推進センター
〒610-0395 京都府京田辺市興戸
TEL (0774) 65-8679 FAX (0774) 65-8680
E-mail:kyoiku-i@dwc.doshisha.ac.jp
ホームページ <http://www.dwc.doshisha.ac.jp>

